

# 元総社蒼海遺跡群（145）

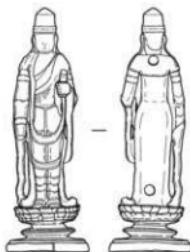
前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021.3

前橋市教育委員会

# 元総社蒼海遺跡群（145）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



P-1号ビット出土小金剛仏 (S=1/2)

2021.3

前橋市教育委員会



調査区西側全景（南東から 左奥に浅間山、右奥に榛名山）



調査区全景（合成写真 上が北）



小金銅仏出土状況（南から）

0 1:1 5cm

P-1号ピット出土小金銅仏

## はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、國府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（145）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野國府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、牛池川左岸に広がる古墳時代、平安時代の集落跡が見つかりました。また、多数のピットが検出され、その中のひとつからは、小金銅仏が出土しました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和3年3月

前橋市教育委員会  
教育長　吉川　真由美

## 例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う「元総社蒼海遺跡群（145）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査および整理作業の体制は以下の通りである

遺跡名　　元総社蒼海遺跡群（145）（前橋市0142遺跡）  
遺跡コード　2 A 261  
遺跡所在地　群馬県前橋市総社町総社3583、3587-1  
監理指導　　小峰 篤（前橋市教育委員会）  
発掘調査・整理作業担当　佐野良平（技研コンサル株式会社）  
発掘調査期間　令和2年11月4日～令和2年12月25日  
整理・報告書作成期間　令和3年1月4日～令和3年3月25日  
発掘調査・整理作業参加者  
大川明子 丸山和浩（技研コンサル株式会社）  
芦川良紀 新井 實 安藤三枝子 鳥島由夫 石川承子 稲敷美枝子 上沢公一 宇賀美代子  
大畠吉司 岡部四朗 関本陽一 小田切幹緒 桃澤 泉 鎌田 昇 小林 和 坂庭孝代 桜田正人  
佐藤文江 杉田友香 須田勝美 関根信子 曾根 裕 高見壽美子 立川千栄子 田所順子 土屋利治  
中島三郎 平井国栄 星野一江 細野竹美 堀越英行 正木祐子 真下かほる 松井 勝 森田恵子  
水野さかゑ 吉浦英和

3 本書の編集は佐野が行い、原稿執筆についてはIを小峰、他を佐野が担当した。

4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

5 下記の諸氏・諸機関に有益なご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

池田敏宏 伊藤俊治 斎藤明日乃 松澤樹生 水落建設 元総社公民館 山下工業株式会社

## 凡　　例

1 掘図中に使用した北は座標北であり、座標については日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅷ系を使用した。

2 掘図に国土地理院発行1/25,000「前橋」、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 土層および遺物の色調は「新版標準土色帖」（農林水産技術会議事務局監修、財团法人日本色彩研究所色票監修）に掲げる。

4 遺構名称は次のとおりである。

　　堅穴住居跡：H　堅穴状遺構：T　道路状遺構：R　溝・堀跡：W　井戸：I　土坑：D　ピット：P

5 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

　　遺構　堅穴建物跡、堅穴状遺構、溝跡、井戸、土坑、ピットほか・・・1/30、1/60、1/100

　　全体図・・・1/250、1/100

　　遺物　土器・・・1/1、1/3、1/4　瓦・・・1/6　鉄・銅製品・・・1/1、1/2

　　石製品・・・1/1、1/4

6 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

7 遺構図・遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構・・・地山： 未調査部分： 硬化面： 炭化物・灰範囲：

遺物・・・須恵器（還元焰）断面： 須恵器（酸化焰）断面：

灰釉陶器・磁器断面：

黒色処理範囲： 漆範囲： 煤・焦げ範囲：

施釉範囲： 摩耗範囲：

## 目 次

卷頭図版1

卷頭図版2

はじめ

例言・凡例・目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査方針と経過	8
1 調査範囲と基本方針	8
2 調査経過	8
IV 基本土層	8
V 遺構と遺物	9
1 住居跡	9
2 壁穴状遺構	12
3 道路状遺構	13
4 溝・堀跡	13
5 井戸	13
6 土坑	13
7 ピット	14
8 掘削坑跡	14
9 牛池川崖線	14
VI まとめ	49

写真図版

抄録・奥付

## 挿図目次

Fig.1 遺跡の位置	1	Fig.18 調査区全体図（1）	27
Fig.2 周辺遺跡図	3	Fig.19 調査区全体図（2）	28
Fig.3 周辺調査地点とグリッド設定図	7	Fig.20 調査区全体図（3）	29
Fig.4 基本土層	8	Fig.21 調査区全体図（4）	30
Fig.5 菅海城縄張図	14	Fig.22 調査区全体図（5）	31
Fig.6 調査区全体図	15	Fig.23 造構断面図（1）	32
Fig.7 H-1号住居跡	16	Fig.24 造構断面図（2）、土坑（1）	33
Fig.8 H-2・3号住居跡	17	Fig.25 土坑（2）	34
Fig.9 H-3・4・6・7 ・9・12~14・17号住居跡	18	Fig.26 土坑（3）	35
Fig.10 H-4・5号住居跡	19	Fig.27 土坑（4）	36
Fig.11 H-5~7号住居跡	20	Fig.28 土坑（5）、ピット	37
Fig.12 H-7・8号住居跡	21	Fig.29 出土遺物（1）	37
Fig.13 H-9・12・13・17号住居跡	22	Fig.30 出土遺物（2）	38
Fig.14 H-10・11号住居跡	23	Fig.31 出土遺物（3）	39
Fig.15 H-14~16号住居跡	24	Fig.32 出土遺物（4）	40
Fig.16 T-3~5号堅穴状遺構	25	Fig.33 出土遺物（5）	41
Fig.17 R-1号道路状遺構、I-1~3号井戸	26	Fig.34 小金剛仏部位名称	50

## 表目次

Tab.1 周辺遺跡一覧表	3	Tab.5 土坑計測表	42
Tab.2 元慈社遺跡群遺跡一覧表	4	Tab.6 ピット計測表	43
Tab.3 溝・堀跡計測表	42	Tab.7 出土遺物観察表	46
Tab.4 井戸計測表	42	Tab.8 群馬県内出土の金剛仏（奈良・平安）	52

## 写真図版

PL.1 調査区西側全景、調査区東側全景	
PL.2 H-1全景、H-1カマド1全景、H-1カマド2全景、H-1貯蔵穴全景、H-2全景、H-3全景、 H-3カマド全景、H-4全景	
PL.3 H-4カマド全景、H-5全景、H-5カマド全景、H-5カマド遺物出土状況、H-6全景、H-7全景、 H-7掘り方全景、H-7遺物出土状況全景	
PL.4 H-7カマド全景、H-7貯蔵穴全景、H-8全景、H-8カマド全景、H-9全景、H-10全景、H-10カマド全景、 H-11全景	
PL.5 H-12全景、H-12カマド全景、H-12カマド遺物出土状況、H-13全景、H-13カマド全景、H-14全景、 H-15全景、H-16全景	
PL.6 T-3全景、T-4全景、T-5全景、R-1全景、W-10~14全景	
PL.7 W-1~5・7・9全景、W-6全景、W-8全景、I-1全景、I-2全景、I-3全景、D-9全景、 D-10全景	
PL.8 D-11・12全景、D-15全景、D-17全景、D-20・35全景、D-26・49全景、D-30全景、D-40・67全景、 D-43・68全景	
PL.9 D-46全景、D-75・76・82・98・99全景、ピット群全景、探査坑跡全景、作業風景	
PL.10~12 出土遺物	

## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、22年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和2年9月30日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することになった。同年10月27日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査着手に至った。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（145）」（遺跡コード：2A261）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（145）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

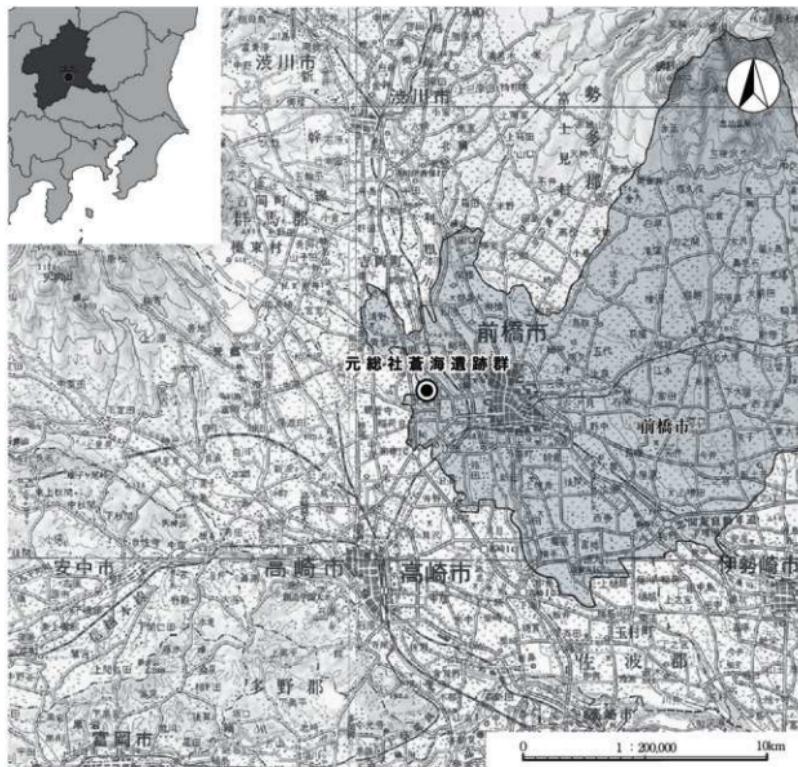


Fig. 1 遺跡の位置

## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

元総社蒼海遺跡群（145）は、前橋市街地から利根川を隔て西へ約3.6kmの地点、前橋市総社町地内に所在する。遺跡地の西側には関越自動車道が南北に、南側には国道17号高崎前橋バイパス、主要地方道前橋・安中・富岡線が東西にそれぞれ走っている。

本遺跡は、榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地端部と前橋台地との移行地帯に立地する。遺跡周辺には、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛池川、染谷川が流れている。これらの河川の開析作用によって細長い微高地と低地が多く形成されており、その比高差は3～5mを測る。遺跡が立地する周辺域は前橋市中心部から続く市街地の西端にあたり、主に畠地として利用されていた。近年、元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって宅地や商業施設が立ち並び、市街地化が拡大している。

### 2 歴史的環境

本遺跡が所在する元総社地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要是以下の通りである。

（1）繩文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東〔14〕・産業道路西〔15〕、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域〔21〕・元総社小見三遺跡・元総社蒼海遺跡群（24）などが挙げられ、堅穴住居跡が確認されている。

（2）弥生時代 当該期の遺跡は日高遺跡〔16〕〔17〕・上野国分僧寺尼寺中間地域・正觀寺遺跡〔20〕などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では浅間C軽石下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。

（3）古墳時代 利根川右岸の地域は県内でも有数の古墳密集地域であり、それを代表するものとして総社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳〔7〕・愛宕山古墳〔8〕・宝塔山古墳〔9〕・蛇穴山古墳〔10〕などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺〔4〕が建立され、総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王庵寺は昭和3年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和49～56年にかけて7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」範囲の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成9～11年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成18・19年度調査では北・東・西面、平成20年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成21年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成22年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術によるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。この時代の集落は牛池川と染谷川に挟まれた台地上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、元総社明神遺跡〔23〕・元総社北川遺跡・総社闍泉明神北IV・V遺跡などで水田跡が確認されている。

（4）奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるよう、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域に約900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔13〕では県



Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	元経社舊海塗跡群 (145)	11	遠見山古墳	21	上野因分御寺 - 鎌寺中間地域	31	御船遺跡	41	大渡追跡遺跡
2	上野因分御跡	12	梅町山古墳	22	北原遺跡	32	御越日遺跡	42	大渡追跡日遺跡
3	上野因分御跡	13	元経社小学校裏遺跡	23	元経社明神通路 I - VⅢ	33	大友ノ原数々・日遺跡	43	鶴崎城遺跡東遺跡
4	山口殿分御跡	14	前堀通路東遺跡	24	南坂通路遺跡	34	元経社寺田通路 I - II	44	呂家分御跡 - II 遺跡
5	東高道 (確定)	15	東高道路西遺跡	25	南坂南通路	35	元経社早瀬山遺跡	45	天原敷跡 I - Ⅳ
6	日高道 (確定)	16	日典通路	26	御坂村東遺跡	36	赤動通跡 - I 遺跡	46	河東遺跡
7	壬生古墳	17	日高通路	27	寺田通路	37	元経社合合通路	47	因分坂通跡 - II - 日遺跡
8	愛宕山古墳	18	中尾通路	28	天保通跡 - II 遺跡	38	西部第一高台遺跡群 (1)	48	元経社西川清跡
9	宝場山古墳	19	鳥羽通路	29	天伴日通跡	39	元経社福地通路	49	上野因分御跡通路
10	松次山古墳	20	正綱寺通路 I - IV	30	御敷通跡 - II 遺跡	40	大友七地通路群	50	元経社新海通路群

下最大級の掘立柱建物跡が検出され、元総社蒼海遺跡群（99）・（127）・（136）、上野国府等範囲内容確認調査28・33・34トレーナーでは掘込地業を持つ建物跡が、元総社蒼海遺跡群（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。元総社寺田遺跡〔34〕では「國府」・「曹司」・「國」・「邑厨」などの墨書き土器や人形が出土している。元総社明神遺跡では南北方向の溝跡、閑泉橋遺跡〔24〕や元総社蒼海遺跡群（7）・（9）・（10）・（134）では東西方向の溝跡が確認され、国府域の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面鏡や縁釉陶器、巡方（腰帶具）なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。推定国府城の南方では高崎市浜川町周辺からN-64°-E方向へ東山道（国府ルート）が延びると考えられている。前橋市域では平成28年度上野国府等範囲内容確認調査において2時期の両側側溝を持つ道路跡を確認している。鳥羽遺跡でも2条の道路跡が確認されている。日高遺跡では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和55年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・塗垣・堀等が確認されている。また、平成24年度から28年度にかけての第2期発掘調査において、これまでの金堂が講堂であったことが判明する等、伽藍配置の変更が行われている。国分尼寺は昭和44・45年のトレーナー調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査團により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の塗垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成28年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成29年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。

当該期の一般的な集落は、古墳時代と同様に牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定城の中心部での分布は少なく、国府城と居住域の区分けが看取できる。近年の調査による元総社蒼海遺跡群（40）で8世紀後半の居住跡内の一角に鍛冶遺構が検出されている。元総社蒼海遺跡群（41）では9世紀後半の鍛冶工房が検出され、同遺跡からは金の付着した灰釉陶器や奈良三彩といった貴重な遺物が出土している。また、元総社蒼海遺跡群（64）では8世紀前半には廃絶されたと考えられる製鉄炉跡（箱型炉）が1基、元総社稻葉遺跡〔39〕では10世紀に想定される製鉄炉跡（小型自立炉）が2基確認されている。

（5）中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されており、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋、持腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は源氏・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、慶長六年（1601）に秋元長朝が総社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。

Table 2 元総社遺跡群遺跡一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
-	元総社蒼海遺跡群（1）	2005	古墳～平安：日向鏡、銅之付建物跡、瓦塗造、道路状遺構々、中世：板瓦（青苔層）○鷹文土器（前期）、縫粘、灰釉、二輪鏡、瓦筒、瓦瓶、帶妻貝、鐵棒
-	元総社蒼海遺跡群（2）	2005	古墳、平安：日向鏡、瓦筒、人骨、土器類、中世：鐵劍、瓦筒、瓦瓶状遺構、○鷹文：縫粘、瓦筒、瓦瓶、縫粘
-	元総社蒼海遺跡群（3）：元総社見宝遺跡	2005	古墳、日向鏡、瓦筒、鐵劍、平安：日向鏡、瓦筒状遺跡、道路状遺跡、中世：板瓦、鷹文土器（前～後期）、瓦筒、瓦瓶、縫粘、帶妻貝、鐵棒
-	元総社蒼海遺跡群（4）	2005	鐵劍、日向鏡、古墳、帶妻貝、平安：日向鏡、瓦筒状遺跡、○鷹文土器（前～中期）、瓦筒、縫粘津波形土器、鷹全片、鷹首（通）、瓦筒革、土罐、石質燒造
-	元総社蒼海遺跡群（5）	2005	古墳：日向鏡、帶妻貝、平安：日向鏡、中世：鐵劍状遺構、鐵鍬状遺構、土器羣、火葬堆：○鷹文土器、板瓦、玉手、瓦筒
-	元総社蒼海遺跡群（6）	2005	古墳：砂質保水層、帶妻貝、平安：日向鏡、瓦筒状遺構、鐵鍬状遺構、○鷹文土器、中世：板瓦、鷹文
-	元総社蒼海遺跡群（7）	2005	平安：日向鏡、大刀、日向鏡状遺構、中世：人骨、○鷹文：圓口、網狀
-	元総社蒼海遺跡群（8）	2006	古墳、帶妻貝、平安：日向鏡、中世：鐵劍、瓦筒状遺跡、○鷹文：縫粘、瓦筒、三足土器、紅白目、瓦筒、瓦瓶，每玉
-	元総社蒼海遺跡群（9）：100	2006	鐵劍、日向鏡、古墳、帶妻貝、瓦筒状、瓦筒状伏生燒、鐵劍、日向鏡、鐵劍状遺物跡、大刀、帶妻貝、平安：日向鏡、帶妻貝伏生燒、砂質保水層、○鷹文土器（中間～後期）、瓦筒、土罐、瓦瓶、火葬堆、火葬堆、小刀、瓦筒、縫粘、帶妻貝、土罐、石質燒造土器、縫粘
-	元総社蒼海遺跡群（11）	2006	古墳～平安：日向鏡、瓦筒、土罐、○鷹文土器（前～中期）、瓦筒、土罐、瓦瓶、土罐、中世：板瓦、瓦筒、瓦瓶
-	元総社蒼海遺跡群（12）	2006	古墳、鐵劍、平安：日向鏡、瓦筒、中世：鐵劍、○鷹文：縫粘、瓦筒
-	元総社蒼海遺跡群（13）	2008	鐵劍、日向鏡、瓦筒、帶妻貝、平安：日向鏡、瓦筒、中世：土筑基、○鷹文土器（前期）、縫粘、瓦筒、瓦瓶、鐵劍、帶妻貝、瓦筒、瓦瓶、鐵劍、帶妻貝、瓦筒、中世：土筑基、○鷹文：縫粘
-	元総社蒼海遺跡群（14）	2008	古墳：日向鏡、瓦筒、帶妻貝、鐵劍、日向鏡、瓦筒、平安：日向鏡、鐵劍状遺物跡、中世：板瓦（青苔層）、瓦筒状遺跡、○鷹文：縫粘、瓦筒





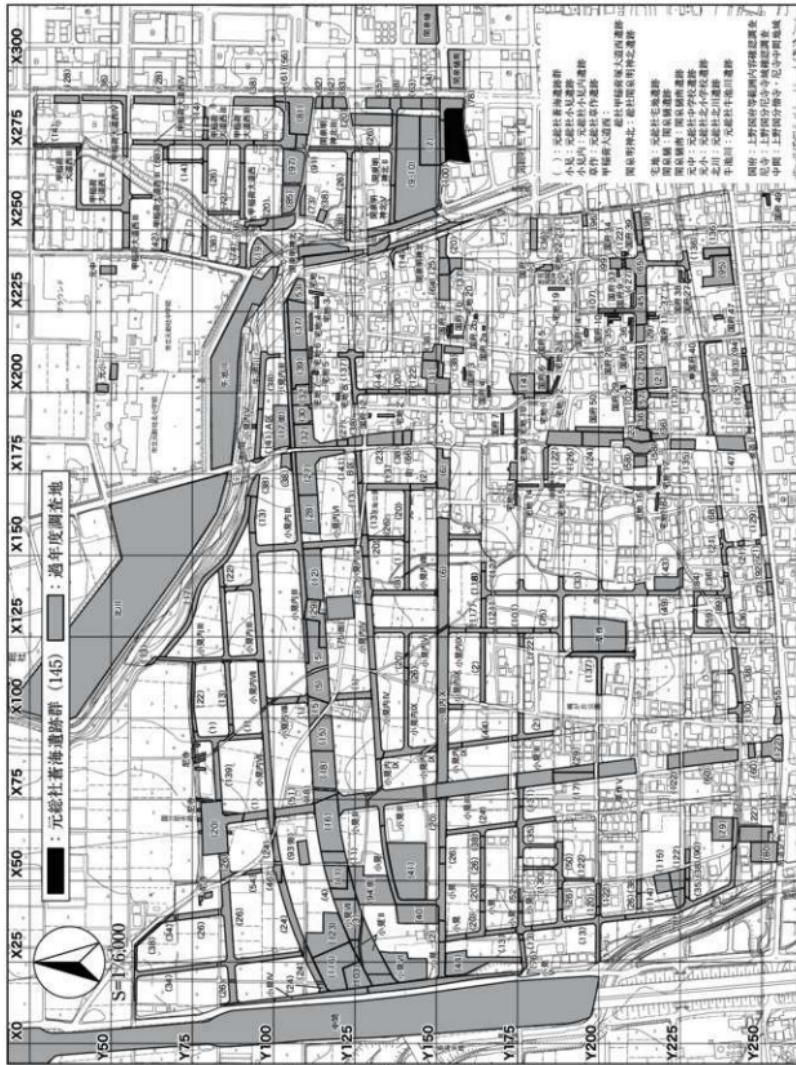


Fig. 3 周辺調査地点とグリッド設定図

### III 調査方針と経過

#### 1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業地内であり、調査面積は1467 m<sup>2</sup>である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000を基点とする4mピッチのものを使用した。なお経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点 日本測地系（第IX系） 世界測地系（第IX系：測地成果2011）  
X 280、Y 155 X = 43380.000 m、Y = - 71080.000 m X = 43734.844 m、Y = - 71371.301 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45 m<sup>3</sup>バックホー）にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行なった。記録写真は35mm判モノクロ・リバーサルフィルムと、デジタルカメラの3種類を用いて撮影を実施した。調査区全景撮影についてはドローンを用いて撮影を実施した。

#### 2 調査経過

調査区内に排土置き場を設置する関係上、調査区を東西に二分し西側から着手した。西側の調査終了後、埋め戻したち東側の調査へと移行した。調査経過については以下の通りである。令和2年11月4日、調査区西側から表土掘削を開始した。遺構確認作業も同時に開始。試掘調査時に調査区西端部で確認された性格不明遺構が牛池川へと下がる崖線であることが判明する。9日、調査区西側の表土掘削が終了する。作業員による遺構掘削開始。26日、調査区西側の全景撮影を行う。27日、調査区西側の全体測量。30日から調査区西側の埋め戻し作業開始。12月3日、埋め戻し完了。調査区東側の表土掘削に移行する。4日から作業員による遺構確認・掘削開始する。7日、調査区東側の表土掘削が終了する。18日、調査区西側の全景撮影を行う。同日完了検査を受ける。21日、調査区東側の全体測量。22日から25日まで調査区東側の埋め戻し作業を行い、25日に現地での作業を終了する。

### IV 基本土層

基本土層は調査区中央南側の壁面にて観察を行った。As-B混土を含むⅡ層土は調査区全域で確認された。特に調査区西側の牛池川崖線付近は地形が傾斜していることも影響して、他の箇所と比較して厚く堆積していた。Ⅲ層以下は総社砂層である。覆土中にはAs-Bの純層やAs-C軽石を含んだ黒色土が確認できる遺構もいくつかみられる。



Fig.4 基本土層

## V 遺構と遺物

### 1 住居跡

#### H-1号住居跡 (Fig. 7・29, Tab. 7, PL. 2・10)

位置 X275・276、Y157・158 主軸方向 N - 80° - E 規模 東西 352 m、南北 4.20 m、壁高 0.21 m。床面積 (17.5) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 D - 13・14・16・21 と重複。本遺構が最も古い。カマド 2 基確認。燃焼部の使用状況からカマド 2 からカマド 1 へと造り替えられている。カマド 1：東南隅で確認。全長 1.76 m、燃焼室幅 0.75 m。住居跡軸に対して斜方向に延びる。燃焼室は楕円形形状を呈し、煙道部へ向かって窄まっていく。燃焼室・煙道の底面はほぼ平坦で、住居跡床面と比較して若干下がる。燃焼室の底面には炭化物・灰が確認でき、側面上部は焼土化している。煙道部側面上部も同様に焼土化が認められる。カマド 2：南西隅で確認。カマド 1 と同様に住居跡に対して斜方向に延びる。確認長 0.97 m、燃焼室幅 0.54 m。煙道部側壁と燃焼部底面が若干焼土化している。炭化物・灰は確認されず。貯蔵穴 東南隅で確認。平面形状楕円形で底面は平坦。位置関係からカマド 1 に付随する貯蔵穴と考えられる。柱穴 4 基確認 出土遺物 須恵器羽釜 (1)、坏 (2)、鉄製錙 (3) を図示。1 はカマド 1 内底面から出土している。時期 出土遺物の傾向から 11 世紀前半と推定される。

#### H-2号住居跡 (Fig. 8・29, Tab. 7, PL. 2・10)

位置 X275・276、Y157・158 主軸方向 N - 90° - E 規模 東西 4.68 m、南北 4.45 m、壁高 0.17 m。床面積 19.1 m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 D - 36・37・38・57・65・71 と重複。本遺構が最も古い。カマド 東壁やや南側で確認。煙道部のみ残存する。確認長 0.70 m、燃焼室幅不明。煙道部側壁はやや焼土化し、底面は平坦である。貯蔵穴 確認できず 柱穴 2 基確認 出土遺物 板状の鉄製品 (1) を図示。その他に土師器・須恵器が少量出土している。時期 出土遺物の傾向から 10 世紀と推定される。

#### H-3号住居跡 (Fig. 8・9・29・30, Tab. 7, PL. 2・10)

位置 X285・286、Y156・157 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西 2.75 m、南北 3.69 m、壁高 0.17 m。床面積 14.6 m<sup>2</sup> 床面 地山床。中央部から北西側にかけて硬化面が広がる。重複 H - 4・6・9・12・13・17 と重複。本遺構が最も新しい。カマド 東壁中央で確認。煙道部は削平により消失。確認長 0.96 m、燃焼部幅 0.35 m。左袖に石 (砥石転用品) を立て袖石としている。右袖には袖石は確認できず。燃焼室は楕円形を呈し、中央に支脚石を設置している。底面は住居跡床面とほぼ変わらず平坦である。貯蔵穴 位置関係から D - 78 が貯蔵穴と考えられる。柱穴 確認できず 出土遺物 須恵器坏 (1)、坏 (2~5)、羽釜 (6)、支脚石 (7) を図示。支脚石は砥石として使用された転用品である。その他に土師器・須恵器が少量出土している。時期 須恵器坏の年代とその他の出土遺物の傾向から 11 世紀前半と推定される。

#### H-4号住居跡 (Fig. 9・10・24, PL. 2・3)

位置 X285・286、Y157 主軸方向 N - 87° - E 規模 南側が一部調査区外。東西 3.76 m、南北 (3.34) m、壁高 0.08 m。床面積 (14.2) m<sup>2</sup> 床面 カマド前面に硬化面が広がる。下位の遺構が重複する場所は暗褐色土を充填して貼り床とし、その他は地山床としている。重複 H - 3・6・12~14 と重複し、新旧関係は H - 6・12~14 → 本遺構 → H - 3 である。カマド 西壁中央で確認。確認長 (1.00) m、燃焼部幅 0.71 m。燃焼室手前の底面には炭化物・灰が広がり、燃焼室内の火床面には灰が僅かに散っている。煙道部側壁上部には被熱して焼土化した痕跡が確認できる。住居跡床面から煙道部へは緩やかに上っている。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 土師器・須恵器が少量出土している。時期 出土遺物が少なく重複関係のみで判断するしかないため、7 世紀後半から 10 世紀代と年代幅が広い推定となる。

#### H-5号住居跡 (Fig.10・11・30, Tab. 7, PL. 3・10)

位置 X283・284、Y153・154 主軸方向 N - 88° - E 規模 北側が一部調査区外。東西 3.08 m、南北 (2.41) m、壁高 0.11 m。床面積 (12.4) m<sup>2</sup> 床面 地山床。カマド前から住居跡中央部にかけて硬化面が広がる。  
重複 D - 74 と重複し、新旧関係は本遺構→D - 74 である。カマド 東壁やや南側で確認。確認長 1.06 m、燃焼部幅 0.47 m。確認時には崩壊していたが総社砂層の切り石を用いて袖・焚口・燃焼室側面を構築している。崩落した切り石の下から瓦 (2・3) が出土している。この瓦も構築材であった可能性が考えられる。焚口天井部に用いられていた切り石は赤く被熱した状態であった。燃焼室手前から燃焼室の底面には炭化物・灰が広がっている。燃焼室から煙道部にかけては緩やかに上っていく。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 須恵器壺 (1)、平瓦 (2・3) を図示。瓦はカマド内から出土している。時期 出土遺物の傾向から 10世紀と推定される。

#### H-6号住居跡 (Fig. 9・11・24・30, Tab. 7, PL. 3・10)

位置 X285～287、Y157 主軸方向 N - 34° - W 規模 南側の大部分が調査区外。東西 (4.35) m、南北 (2.76) m、壁高 0.31 m。床面積 (11.6) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 3・4 と重複。本遺構が最も古い。カマド 北壁で確認。確認長 0.27 m、燃焼部幅 0.37 m。袖・燃焼室は崩壊しており、周囲には焼土粒・炭化物が広がる。火床面有り。煙道部が短く住居跡外へと突出している。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 土師器壺 (1・2) を図示。時期 土師器壺と出土遺物の傾向から 6世紀後半と推定される。

#### H-7号住居跡 (Fig.11・12・22・24・30, Tab. 7, PL. 3・4・10)

位置 X285～287、Y155～157 主軸方向 N - 32° - W 規模 調査区外の東側部分は元総社蒼海遺跡群 (78) において H - 5 として確認されている。東西 (5.51) m、南北 7.88 m、壁高 0.32 m。床面積 (28.4) m<sup>2</sup> 床面 カマド前から中央部にかけて硬化面が広がる。全体に暗褐色土を充填して貼り床をしている。貼り床を除去すると本遺構より一回り小さい壁溝が現れた。状況からみて本遺構へ拡張する前段階の住居跡であると想定される。地山床とし中央部に硬化面もみられる。重複 H - 9・12、W - 10 と重複。本遺構が最も古い。カマド 北壁で確認。確認長 (1.15) m、燃焼部幅 1.07 m。煙道部は W - 10 により消失。袖は崩壊しており、基部が僅かに残存する。燃焼室には土師器甕の小片が散在している。貯蔵穴 カマド左脇で確認。平面形状長方形。深さ 0.57 m。柱穴 2 基確認 出土遺物 土師器壺 (1・2)、甕 (3・4)、白玉 (5) を図示。2 は有段口縁壺である。時期 出土遺物の傾向から 6世紀後半と推定される。

#### H-8号住居跡 (Fig.12・30, Tab. 7, PL. 4・10)

位置 X283・284、Y155～157 主軸方向 N - 53° - E 規模 東西 4.01 m、南北 3.82 m、壁高 0.12 m。床面積 12.4 m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 D - 80・81・83・89～91・94・97 と重複。本遺構が最も古い。カマド 南東隅で確認。煙道部と燃焼室の一部は D - 83・91 により消失している。確認長 (0.76) m、燃焼部幅 0.40 m。両袖の心材には総社砂層の切り石を用いている。燃焼室中央に火床面が認められる。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 土師器壺 (1～4) を図示。時期 土師器壺の年代から 5世紀後半と推定される。

#### H-9号住居跡 (Fig. 9・13・24・31, Tab. 7, PL. 4・10)

位置 X285～287、Y155・156 主軸方向 N - 90° - E 規模 東側の一部が調査区外。東西 (4.39) m、南北 3.83 m、壁高 0.27 m。床面積 (3.1) m<sup>2</sup> 床面 総社砂層ブロックを含む暗褐色土を充填して貼り床をしている。中央部に硬化面が認められる。西側 (H - 7 と重複しない場所) は地山床。重複 H - 3・7・12 と重複し、新旧関係は H - 7・12→本遺構→H - 3 である。カマド 確認できず 貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 須恵器壺 (1)、鉄製品 (2・3) を図示。2 は釘、3 は径が太く釘というよりはノミに近い印象を受ける。時期 出土遺物と重複関係から 9世紀後半と推定される。

#### H - 10号住居跡 (Fig.14・31、Tab. 7、PL. 4・11)

位置 X285・286、Y153・154 主軸方向 N - 88° - E 規模 北側が調査区外。東西 4.03 m、南北 (3.85) m、壁高 0.08 m。床面積 (14.7) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 16、D - 86・98・99と重複し、新旧関係は H - 16 → 本遺構 → D - 86・98・99である。カマド 東壁中央で確認。確認長 1.11 m、燃焼部幅 0.77 m。左袖には心材である総社砂層の切り石が崩壊しているものの 2つ立つ。火床は広く焼土化している。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 須恵器壺 (1)、転用紡錘車 (2) を図示。その他に土師器・須恵器・灰釉陶器、流れ込みと考えられる円筒埴輪片が出土している。時期 出土遺物と重複関係から 10世紀後半と推定される。

#### H - 11号住居跡 (Fig.14、PL. 4)

位置 X284・285、Y153・154 主軸方向 N - 87° - E 規模 南側が W - 11 により消失。東西 3.13 m、南北 (3.91) m、壁高 0.0 m。床面積 (10.9) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 W - 11、D - 75・76・82と重複。本遺構が最も古い。カマド 確認できず 貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 土師器・須恵器が少量出土。時期 出土遺物が少なく判然としないが、重複関係から 9・10世紀代と推定される。

#### H - 12号住居跡 (Fig.9・13・31、Tab. 7、PL. 5・11)

位置 X285・286、Y156・157 主軸方向 N - 34° - W 規模 大部分が他遺構と重複しているため、北壁からカマドにかけての範囲の検出となっている。東西 (1.83) m、南北 4.84 m、壁高 0.15 m。床面積 (9.2) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 3・4・7・9・17と重複し、新旧関係は H - 17 → 本遺構 → H - 3・4・7・9となる。カマド 南壁で確認。燃焼室から煙道にかけては搅乱により消失。確認長 (0.59) m、燃焼部幅 0.58 m。左袖、焚口天井・支脚に総社砂層の切り石を使用している。燃焼室は平面形状楕円形。中央に円柱状の支脚石が立つ。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 内斜口縁の土師器壺 (1・2)、管玉 (3) を図示。時期 出土遺物と重複関係から 5世紀後半と推定される。

#### H - 13号住居跡 (Fig.13・31、Tab. 7、PL. 5・11)

位置 X284～286、Y156・157 主軸方向 N - 73° - E 規模 東西 3.58 m、南北 3.58 m、壁高 0.37 m。床面積 11.0 m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 3・4・14・17、D - 84・87・88・93と重複し、新旧関係は H - 14・17 → 本遺構 → H - 3・4、D - 84・87・88・93となる。カマド 東壁やや南で確認。確認長 0.99 m、燃焼部幅 0.60 m。燃焼室は平面形状楕円形を呈し、床面より僅かに下がる。覆土中にはカマド構築材として使用された白色粘質土ブロックが含まれていた。貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 土師器壺 (1～6)、須恵器横瓶 (7) を図示。7は片側球形の胴部形態をもつ中容量の横瓶である(中村 2019)。

時期 出土遺物や重複関係から 7世紀後半と推定される。

#### H - 14号住居跡 (Fig.15、PL. 5)

位置 X283～285、Y156・157 主軸方向 N - 33° - W 規模 東西 8.04 m、南北 (4.97) m、壁高 0.19 m。床面積 (13.2) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 4・6・13、D - 80・81・84・85・88・93と重複。本遺構が最も古い。カマド 確認できず 貯蔵穴 確認できず 柱穴 3基確認 出土遺物 土師器・須恵器が少量出土している。土師器は内斜口縁壺・横値壺の小片が主体。時期 出土遺物の傾向と重複関係から 6世紀前半と推定される。

#### H - 15号住居跡 (Fig.15・31、Tab. 7、PL. 5・11)

位置 X282・283、Y154・155 主軸方向 N - 89° - W 規模 南側が W - 11 により消失。東西 2.53 m、南北 (2.55) m、壁高 0.11 m。床面積 (5.3) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 W - 11・12と重複。本遺構が最も古い。カマド 確認できず 貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 須恵器壺 (1) と鉄製品 (2・3) を図示。2は釘、3は縫と想定される。時期 須恵器壺の年代から 10世紀代と推定される。

#### H - 16号住居跡 (Fig.15・24・31、Tab. 7、PL. 5・11)

位置 X286・287、Y153・154 主軸方向 N - 88° - E 規模 南西部のみ確認。東西 (2.60) m、南北 (3.55) m、壁高 0.28 m。床面積 (7.6) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 10、D - 86 と重複。本遺構が最も古い。カマド 確認できず 貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 須恵器羽釜 (1) を図示。その他に土師器・須恵器・灰釉陶器が少量出土。時期 出土遺物の傾向と重複関係から 10世紀前半と推定される。

#### H - 17号住居跡 (Fig.13)

位置 X285、Y156 主軸方向 N - 74° - W 規模 南西部のみ確認。東西 (0.70) m、南北 (1.24) m、壁高 0.10 m。床面積 (7.6) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 H - 3・4・7・9・12・14 と重複。本遺構が最も古い。カマド 確認できず 貯蔵穴 確認できず 柱穴 確認できず 出土遺物 なし 時期 出土遺物がなく判然しないが、重複関係から 6世紀以前と推定される。

### 2 穫穴状遺構

#### T - 1号竪穴状遺構 (Fig.18・23、PL. 9)

位置 X273・274、Y156・157 主軸方向 N - 23° - E 規模 壁面は東側のみで確認。東西 (3.83) m、南北 (3.45) m、壁高 0.18 m。床面積 (6.7) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 T - 2、D - 10 と重複。T - 2 とは覆土状況からの判別が難しく新旧関係不明。D - 10 とは本遺構→D - 10 である。出土遺物 土師器・須恵器が少量出土している。時期 重複する T - 2 と構成、覆土状況が近似するため同様の時期 (11世紀以前) と推定される。

#### T - 2号竪穴状遺構 (Fig.18・23、PL. 9)

位置 X273・274、Y156～158 主軸方向 N - 23° - E 規模 壁面は北・東側のみで確認。東西 (4.31) m、南北 (5.08) m、壁高 0.22 m。床面積 (16.5) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 T - 1、I - 2、D - 40・41・67 と重複。T - 1 とは覆土状況からの判別が難しく新旧関係不明。その他は本遺構→I - 2、D - 40・41・67 である。出土遺物 なし 時期 本遺構と重複している D - 67 (本遺構より新しい) の覆土中に As-B が確認された。D - 67 が 12世紀初頭に帰属する遺構となれば、本遺構はそれ以前の 11世紀以前に推定される。備考 部分的に被熱し焼化した床面が有る。炉跡か。

#### T - 3号竪穴状遺構 (Fig.16・31、Tab. 7、PL. 6・9・11)

位置 X273・274、Y155・156 主軸方向 N - 34° - E 規模 東西 4.63 m、南北 4.33 m、壁高 0.23 m。床面積 16.1 m<sup>2</sup> 床面 総社砂層ブロックを含む暗褐色土を充填し貼り床としている。中央部に硬化面が広がる。床面下 (掘り方) には総社砂層の採掘跡跡が確認できる。採掘坑が放棄された後に土砂を入れ床面を構築したと考えられる。重複 D - 20・23・35、採掘抗跡と重複し、新旧関係は採掘抗→本遺構→D - 20・23・35 である。出土遺物 灰釉陶器皿 (1)、須恵器坏 (2) を図示。その他に土師器・須恵器が少量出土している。時期 出土遺物の傾向から 11世紀前半と推定される。

#### T - 4号竪穴状遺構 (Fig.16、PL. 6)

位置 X277・278、Y155・156 主軸方向 N - 12° - E 規模 東西 (3.69) m、南北 3.44 m、壁高 0.37 m。床面積 (7.1) m<sup>2</sup> 床面 地山床 重複 T - 5、W - 1、D - 26・48～50・65 と重複し、新旧関係は T - 5 → 本遺構→W - 1、D - 26・48～50・65 である。出土遺物 土師器・須恵器・灰釉陶器・炉壁小片が少量出土している。時期 出土遺物が少なく判然としないが 10世紀代と推定される。

#### T - 5号竪穴状遺構 (Fig.16、PL. 6)

位置 X277・278、Y155・156 主軸方向 N - 66° - W 規模 平面形状楕円形、断面擂鉢状を呈する。東西 (3.97) m、南北 (3.69) m、壁高 0.68 m。床面積 (1.1) m<sup>2</sup> 重複 T - 4、W - 1 と重複。本遺構が最も古い。

出土遺物 土師器・須恵器が少量出土している。 時期 重複関係から 10 世紀以前と推定される。

### 3 道路状遺構

#### R-1号道路状遺構 (Fig.17・31、Tab. 7、PL. 6・11)

位置 X279・280、Y153～158 主軸方向 N-6°-W 規模 硬化面の範囲を確認。硬化面の幅東西 0.42 m、確認長南北 (19.82) m。重複 W-2～4 と重複。本遺構が最も新しい。出土遺物 砥石 (1) を図示。その他に近世の陶磁器片が出土。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から近世以降と推定される。備考 本遺構は調査区北側の元総社蒼海遺跡群 (100) で認されている S F-1号道路状遺構と同一遺構である。

### 4 溝・堀跡 (Fig.15・18～24・31、Tab. 7、PL. 6・7・11)

南北に延びる W-2・4 と東西に延びる W-10・11 は位置状況から相関関係にあると考えられる (W-2 と W-10、W-4 と W-11)。溝同士の間には空白区間があり、東西から延びる溝はこの場所で南側に L 字状に屈曲し行き止まる。出土遺物として下層から内耳鍋 (W-4-1、15世紀)、上層から近世の陶磁器片が出土していることから、中世段階に開削され、近世以降に埋没したと推定される。遺構の性格として屋敷を区画する堀跡であると考えられる。

W-7 は元総社蒼海遺跡群 (100) で検出された S Z-1号方形周溝墓 (W-9・13 号溝) の周溝の一部である。覆土中には As-C 軽石を含む黒色土が堆積する。元総社蒼海遺跡群 (100) では方形周溝墓の時期を古墳時代前期としているが、本遺跡ではその時期に関係する遺物は出土していない。各遺構の計測値については「Tab. 3 溝・堀跡計測表」を参照のこと。

### 5 井戸 (Fig.17・32、Tab. 4・7、PL. 7・11)

3 基確認。I-1 からは砥石 (1)、I-2 からは内耳土器 (1) を図示した。I-1・2 共、出土遺物の傾向 (内耳土器を含む) から中世に帰属すると推定される。I-3 は出土遺物が無かったが重複関係 (W-4 より新しい) から近世以降と推定される。各遺構の計測値については「Tab. 4 井戸計測表」を参照のこと。

### 6 土坑 (Fig. 7～10・12・14・18～28・32・33、Tab. 5・7、PL. 7～9・11・12)

全体で 100 基確認された。その中で特徴的なものについて詳細を述べたい。

調査区西側、牛池川崖線付近で確認された長方形の土坑の多くは人骨の出土から土壙墓であると考えられる。該当する土坑は D-7・9・11・12・15・17～19・27・30・32・41・46・67 である。D-11・15・32・67 からは人骨、D-46 からは人骨と齒、D-17 からは馬の骨と歯が出土している。埋納品として D-9 では須恵器坏 (1～5)、D-11 では銅錢 (1・2)、D-15 では須恵器坏 (1)・刀子 (2)・管玉 (3)、D-46 では須恵器坏 (1) と釘 (2・3)、D-67 では銅錢 (1・2) が出土している。土壙墓の年代は出土遺物の傾向や遺構が As-B 混土により被覆されている状況等から 10・11 世紀代と想定される。

調査区中央部・東側を中心に同じ規模の円形土坑が多く確認された。深さには違いはあるものの、直径 1～1.5 m、壁面は直立し底面は平坦という点は共通している。該当する土坑は D-20・22・24・25・29・43・47・55・62・63・68・69・73・74・76・77・79・80～82・84・86・88・92・94・95・97・98 の 28 基である。出土遺物は D-69 で須恵器瓶 (1) が出土している。円形土坑の時期は出土遺物の傾向、覆土状況から古代 (10 世紀代が主体) と想定される。同様の土坑は東に接する元総社蒼海遺跡群 (78) でも確認されている。遺構の性格については不明である。

D-10・35・40 は前述の円形土坑に形状は似ているが、異なる点として底面にピット状の掘り込みがあるこ

とが挙げられる。これは柱のアタリ痕であり、D-10の断面観察からは柱の痕跡も確認できる。本遺跡の北側に位置する元総社蒼海遺跡群（9）（10）で桁行10間×梁行3間、桁行長28.2mの大型建物跡が確認されている（1号掘立柱建物跡）。柱穴の大きさが長軸0.91～1.42m短軸0.70～1.02mを測り、柱痕底部にはアタリ痕がある。D-10・35・40はこの柱穴と同じ様相を呈していると考えられるが、この他に該当する柱穴（土坑）が無く、連続性が見られないことから建物の復元には至っていない。各遺構の計測値については「Tab. 5 土坑計測表」を参照のこと。

## 7 ピット (Fig.16・18～22・24・26・28・33, Tab. 6・7, PL. 9・12)

259基確認。調査区南西側、牛池川崖線に集中して分布する。大部分が覆土にAs-B混土を含むことから中世段階のピットであると推定される。As-B混土を含まない古代に分類されるピットは中世ピット群よりやや東側で少数確認できる。P-1は上層に総社砂層ブロックを含む暗褐色土、下層はそれに炭化物が混じる土層である（Fig.28）。下層からは須恵器（1）と小金銅仏（2）が出土している。1は酸化焰焼成口径10.4cm、底径5.0cm、器高2.7cmと、その特徴から11世紀前半と推定される。2の小金銅仏の詳細については「VIまとめ 2 小金銅仏」に記載。P-26からは青磁塊（1、龍泉窯系B1類）が出土している。各遺構の計測値については「Tab. 6 ピット計測表」を参照のこと。

## 8 採掘坑跡 (Fig.18・23, PL. 9)

調査区西側で確認された。牛池川崖線であるこの場所はやや硬質な総社砂層層位が露出していることから、それをターゲットとして採掘されたとみられる。長方形状に掘削された痕跡が多數確認できる。鍬のような工具で掘られたのだろうか、差し込まれた工具痕跡も確認できた。採掘坑の断面をみるとV字状や箱状のものが多いことから、角柱状に切り出されたことが想定される。採掘された石材は主にカマド構築材として使用されたと考えられ、本遺跡H-5・8・10・12のカマドで確認されている。なおT-3はこの採掘坑跡を埋めて床面を構築している。T-3の年代を11世紀前半としていることから、採掘坑跡の年代は10世紀代以前と推定される。

## 9 牛池川崖線

調査区西側で南西方向に向かって落ち込む傾斜確認し、牛池川崖線沿いであると想定した。本遺跡の北側に位置する元総社蒼海遺跡群（9）（10）でも確認されている。牛池川は河川改修が行われるまでは川幅が狭いことから氾濫を繰り返していたようである。県内の城郭研究の第一人者である山崎一氏が現地形を基に作成した蒼海城縄張図によれば、本遺跡南西部にあたる場所には「風呂沼」と記載されており、低地が広がっていたことがわかる。昭和初期の米軍写真でもその地形が確認することができる。

調査区南西壁の土層観察から中位にAs-B軽石の純層を僅かに含むAs-B混土層が確認できる。崖線付近で確認された堅穴状遺構・土坑群はこの土層により被覆されていたため、12世紀初頭以前の遺構であることがえる。

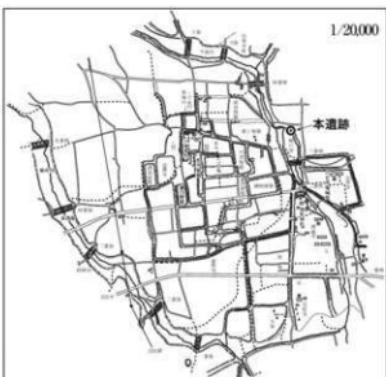


Fig. 5 蒼海城縄張図（山崎1978より一部変更）

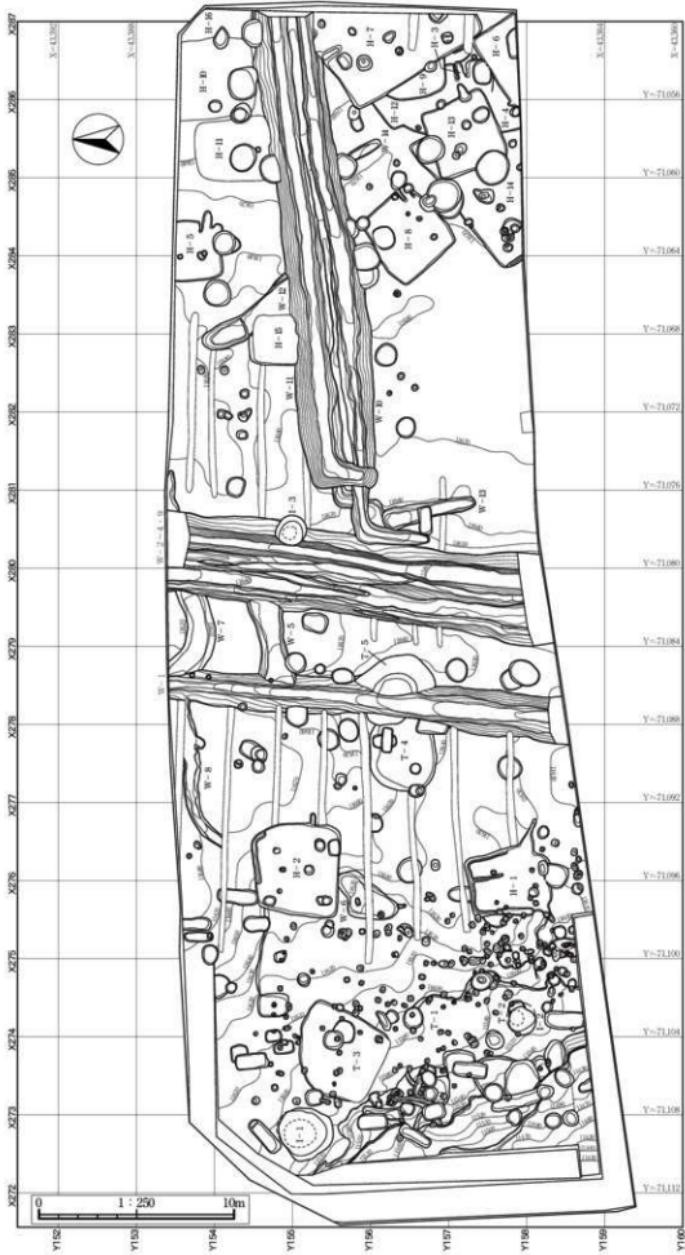


Fig. 6 調査区全体図

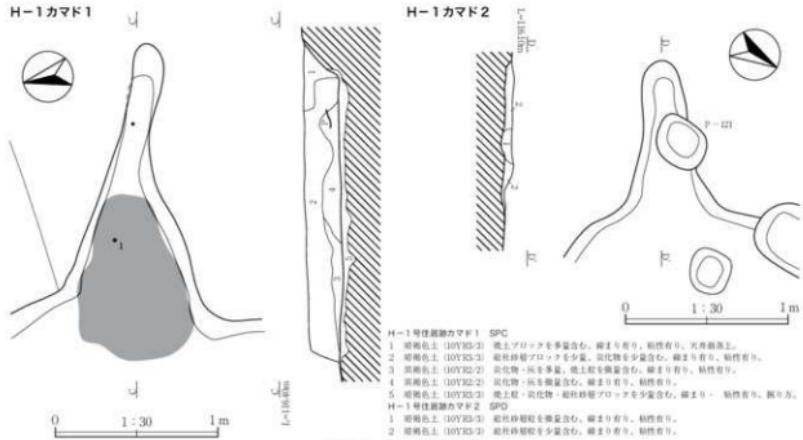
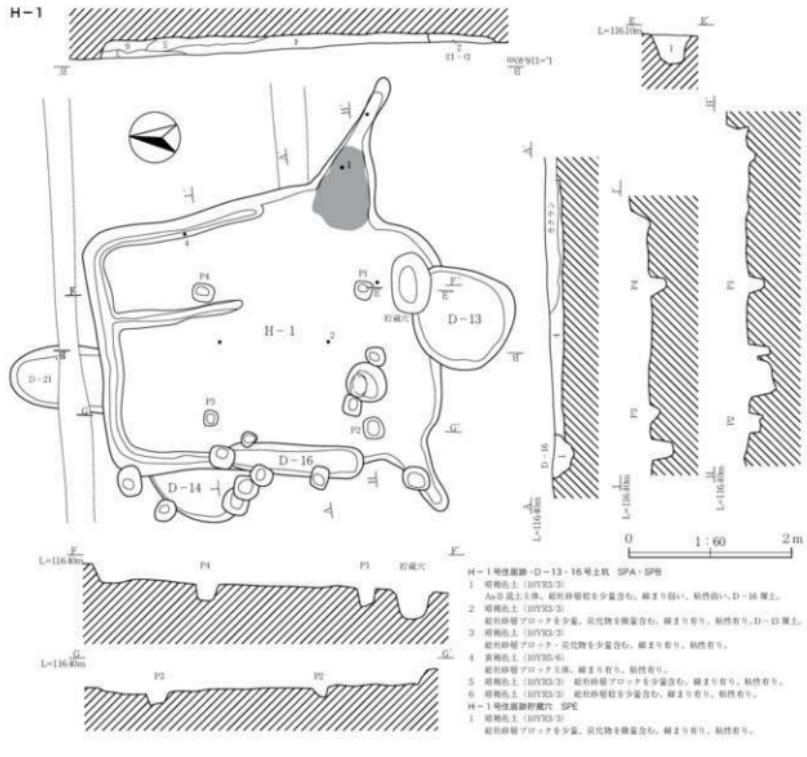
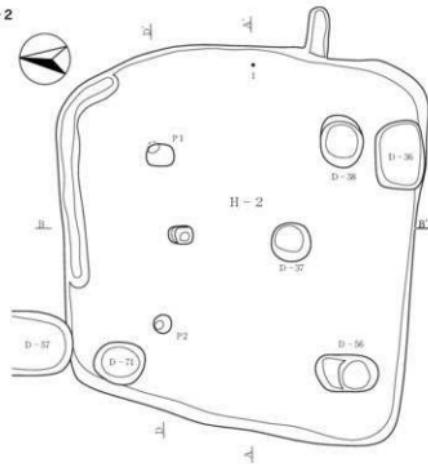


Fig. 7 H-1号住跡断面

H-2



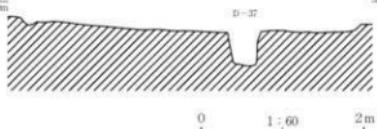
A'



B'



L=116.7m

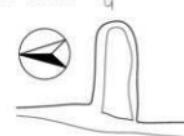


0 1:60 2m

H-2号住居跡 SPA

1. 明褐色土 (10YR3/3) 起伏移動帶を多量含む。緻密有り。粘性有り。
  2. 明褐色土 (10YR3/2) 起伏移動帶を少量含む。緻密有り。粘性有り。
- H-2号住居跡カマド SPA
1. 明褐色土 (10YR2/2) 起伏移動帶 (U) タ・炭化物を少量含む。緻密有り。粘性有り。
  2. 明褐色土 (10YR2/3) 起伏移動帶・炭化物・灰を少量含む。緻密有り。粘性有り。

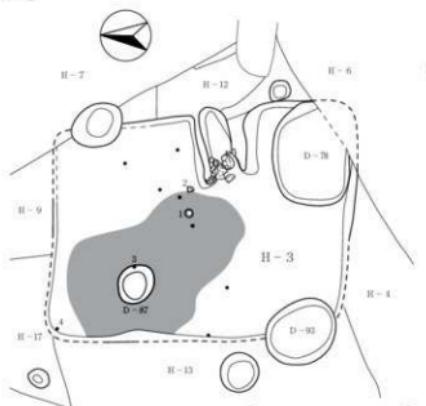
H-2カマド



C'

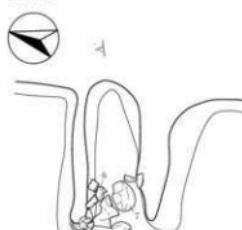


H-3



0 1:60 2m

H-3カマド



A'



Fig.8 H-2・3号住居跡

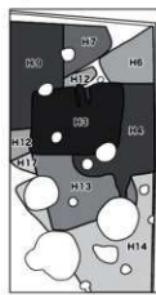
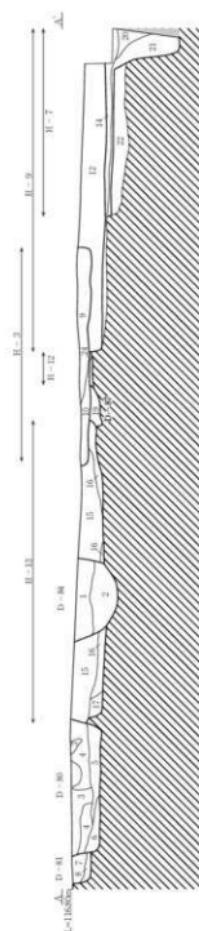
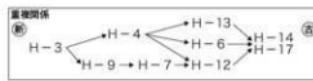
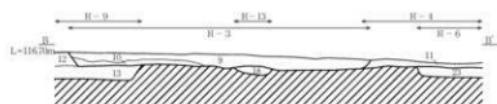
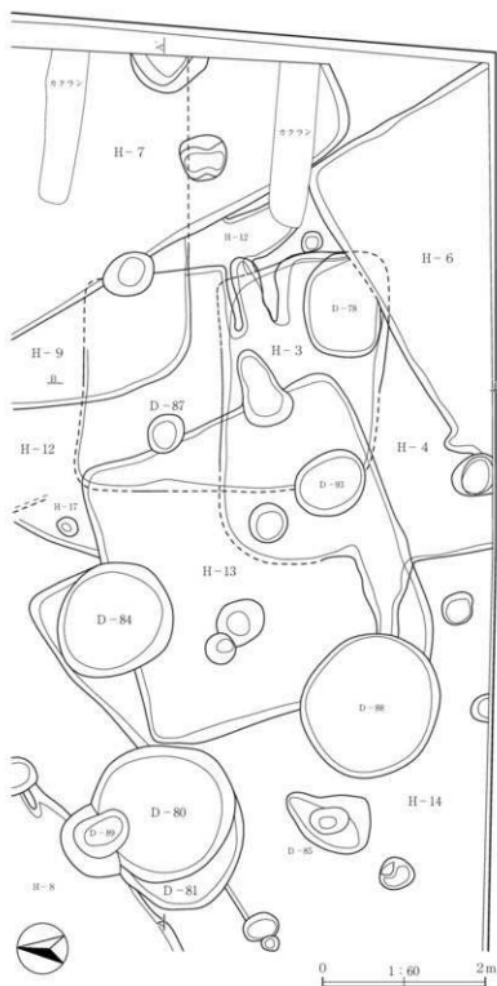
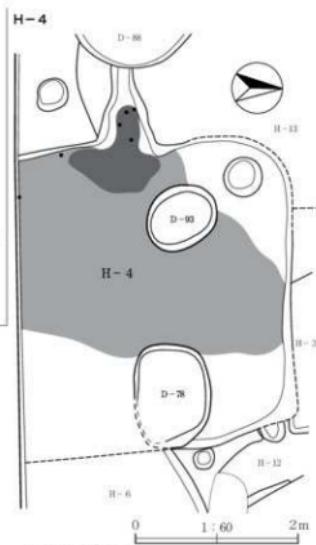
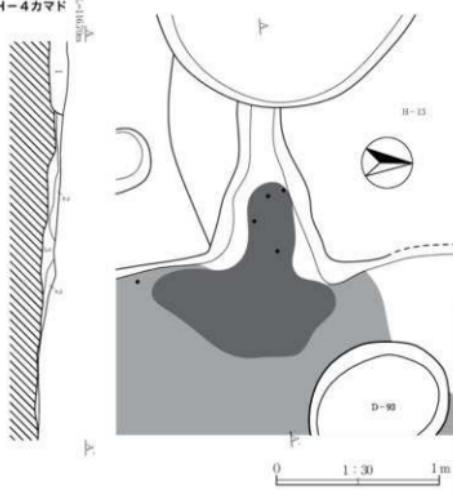


Fig.9 H-3・4・6・7・9・12・14・17号住居跡

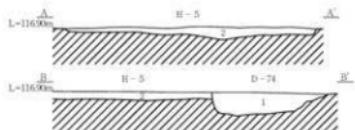
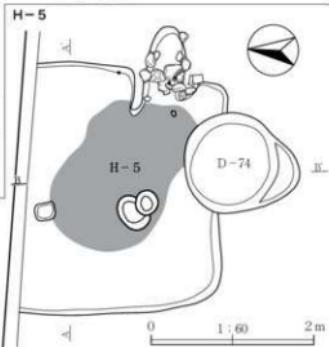
- H-3・4・5・7・9・12・14・17号住居跡 D-80・81・84・87号土柱 SPA・SPB
1. 耕作地土 (HYX3-4) 稲作耕作を含む。AaCを少量含む。縮まり・粘性有り。D-84 地上。
  2. 耕作地土 (HYX3-5) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。D-84 地上。
  3. 耕作地土 (HYX3-6) AaB地土上。解まり悪い。粘性有り。D-84 地上。
  4. 耕作地土 (HYX2-1) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。D-80 地上。
  5. 耕作地土 (HYX2-2) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。D-80 地上。
  6. 耕作地土 (HYX2-3) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。D-80 地上。
  7. 耕作地土 (HYX2-4) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。D-80 地上。
  8. 耕作地土 (HYX2-5) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。D-80 地上。
  9. 耕作地土 (HYX3-2) 稻作耕作プロック・AaCを少量含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  10. 耕作地土 (HYX3-3) AaCを多量含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  11. 耕作地土 (HYX3-4) 稲作耕作を含む。地土上・炭化物を微量含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  12. 耕作地土 (HYX3-5) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  13. 耕作地土 (HYX3-6) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  14. 耕作地土 (HYX3-7) 稲作耕作を含む。AaCを少量含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  15. 耕作地土 (HYX3-8) AaC・粘性有り。H-3 地上。
  16. 耕作地土 (HYX3-9) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  17. 耕作地土 (HYX3-10) 稲作耕作プロックを多量含む。縮まり・粘性有り。H-3 地上。
  18. 耕作地土 (HYX3-11) 白粘性質プロックを多量。炭化物を少量含む。縮まり・粘性有り。H-13 カマド地上。
  19. 耕作地土 (HYX3-12) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。H-13 地上。
  20. 耕作地土 (HYX3-13) 地上・炭化物を少量含む。縮まり・粘性有り。H-7 地上。
  21. 耕作地土 (HYX3-14) 稲作耕作を含む。縮まり・粘性有り。H-7 地上。
  22. 耕作地土 (HYX3-15) 稲作耕作プロックを多量含む。縮まり・粘性有り。H-7 地上。
  23. 耕作地土 (HYX3-16) 稲作耕作プロック・粘性有り。地土上・炭化物を微量含む。縮まり・粘性有り。H-7 地上。
  24. 耕作地土 (HYX3-17) 稲作耕作プロックを微量含む。縮まり・粘性有り。H-12 地上。

H-4カマド



H-4号住居跡カマド SPA

1. 耕作地土 (HYX3-3) 稲作耕作を少量含む。縮まり・粘性有り。D-88 地上。
2. 耕作地土 (HYX3-3) AaCを多量含む。縮まり・粘性有り。H-4カマド地上。
3. 稲作耕作 (HYX3-4) 稲上プロックを多量。AaCを少量含む。縮まり・粘性有り。H-4カマド地上。



H-5号住居跡 SPA・SPB

1. 耕作地土 (HYX3-3) 稲作耕作プロックを微量含む。縮まり・粘性有り。D-74 地上。
2. 耕作地土 (HYX3-3) AaCを多量。稻作耕作プロックを微量含む。縮まり・粘性有り。H-5 地上。

Fig.10 H-4・5号住居跡

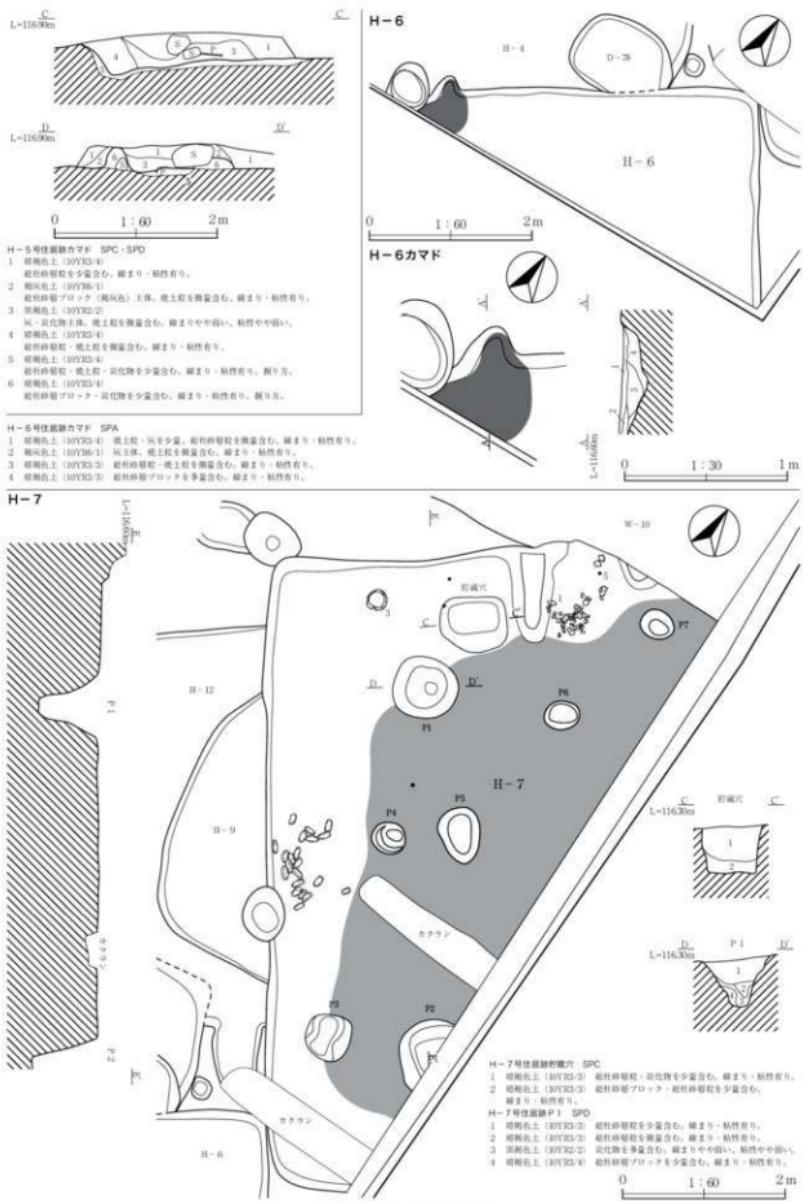


Fig.11 H-5～7号住居跡

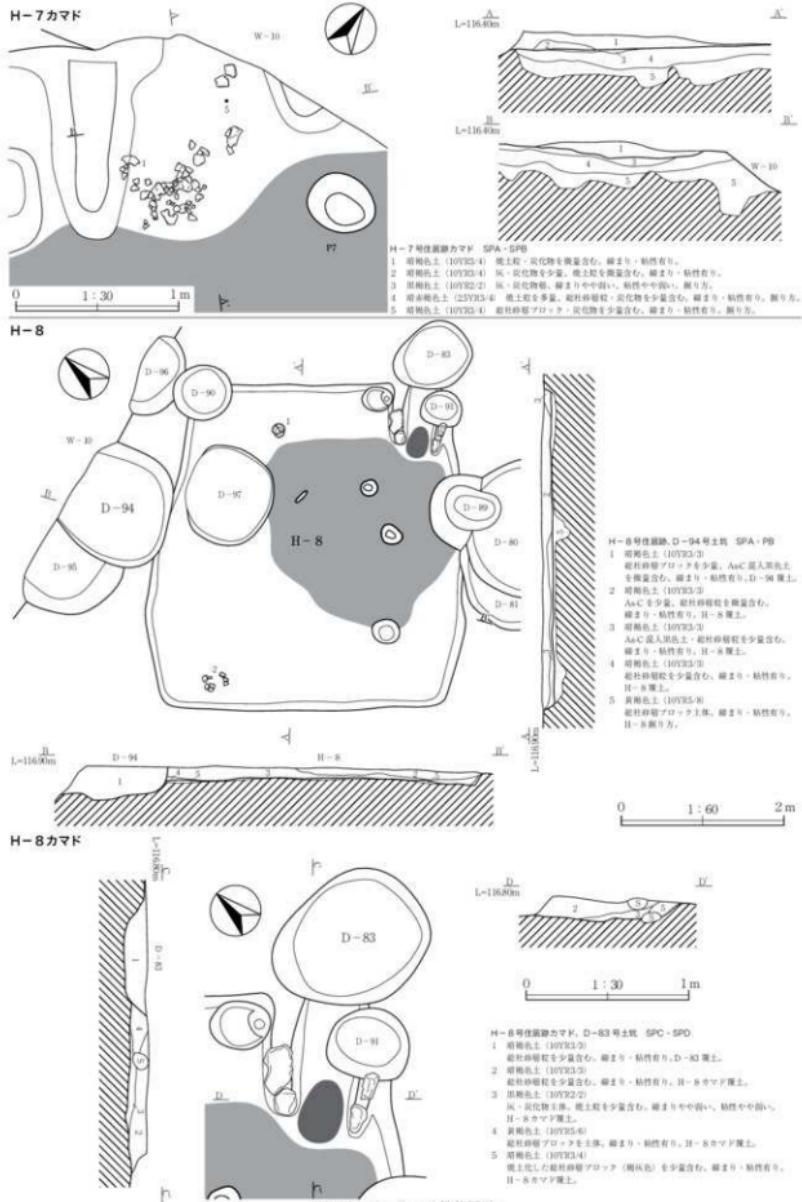


Fig.12 H-7・8号住居跡

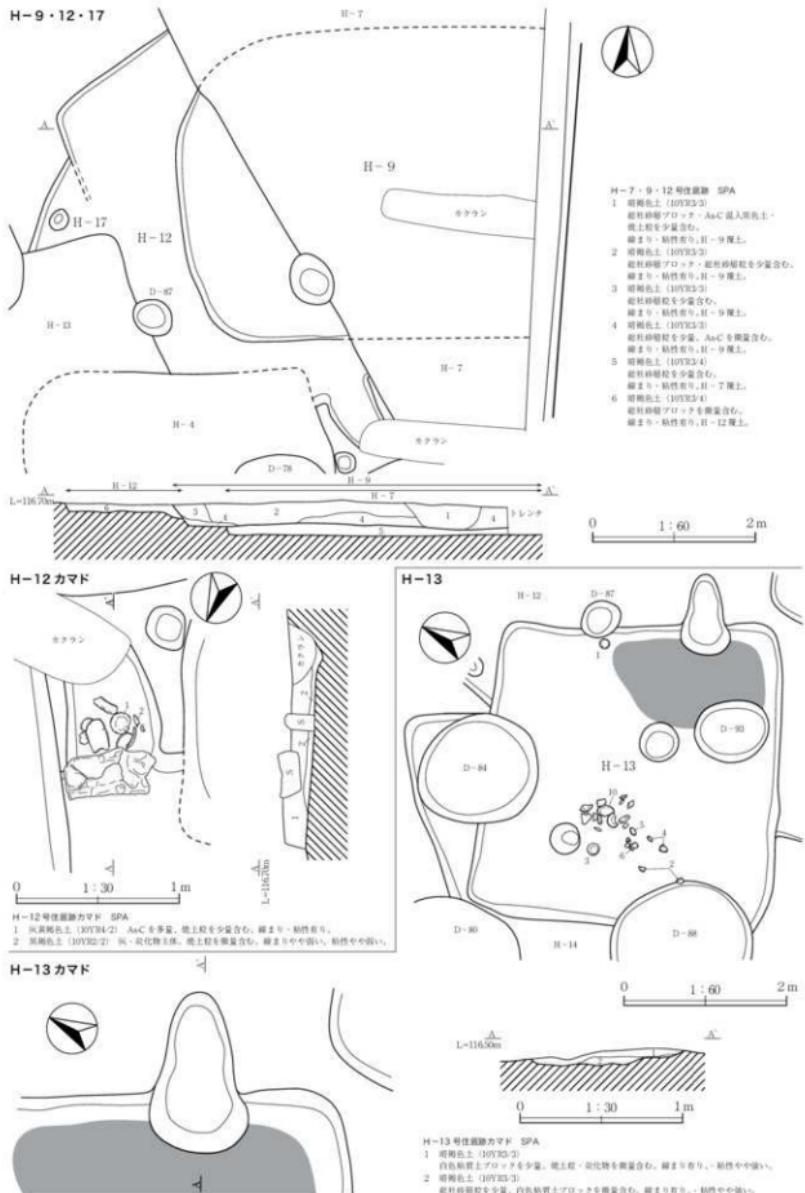


Fig.13 H-9・12・13・17号住居跡

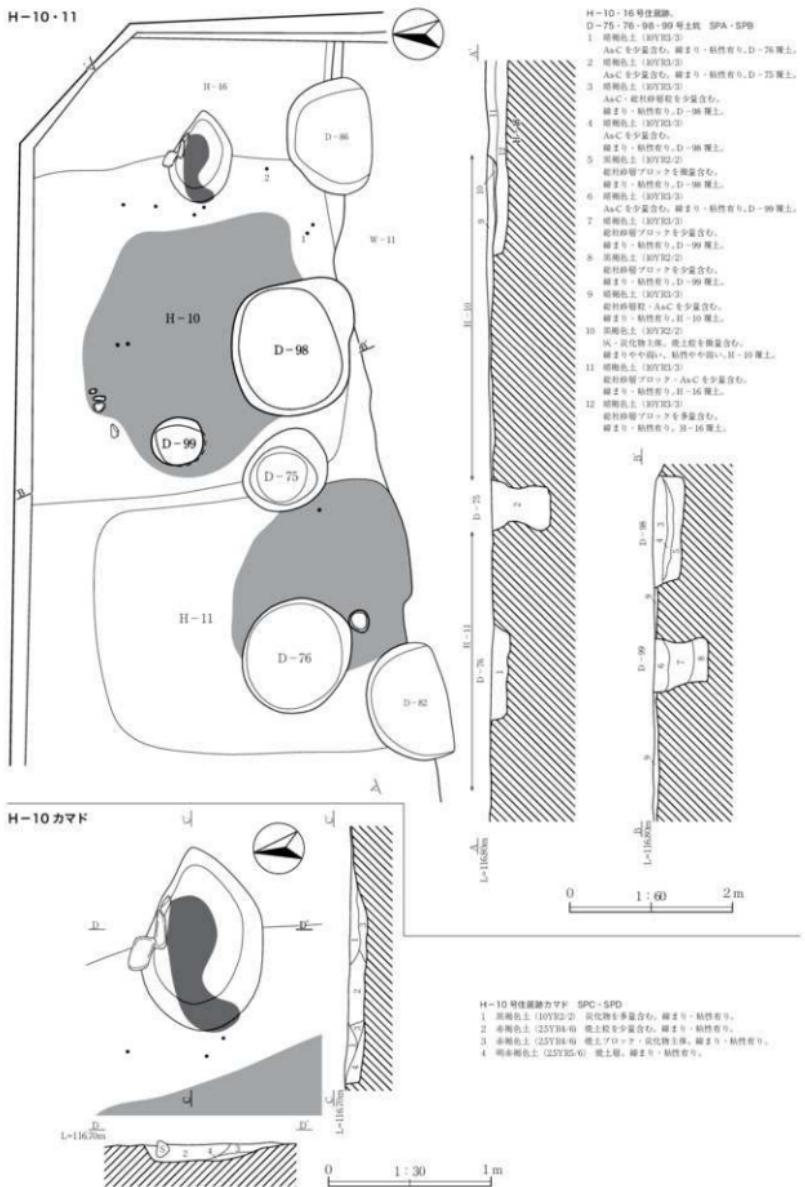
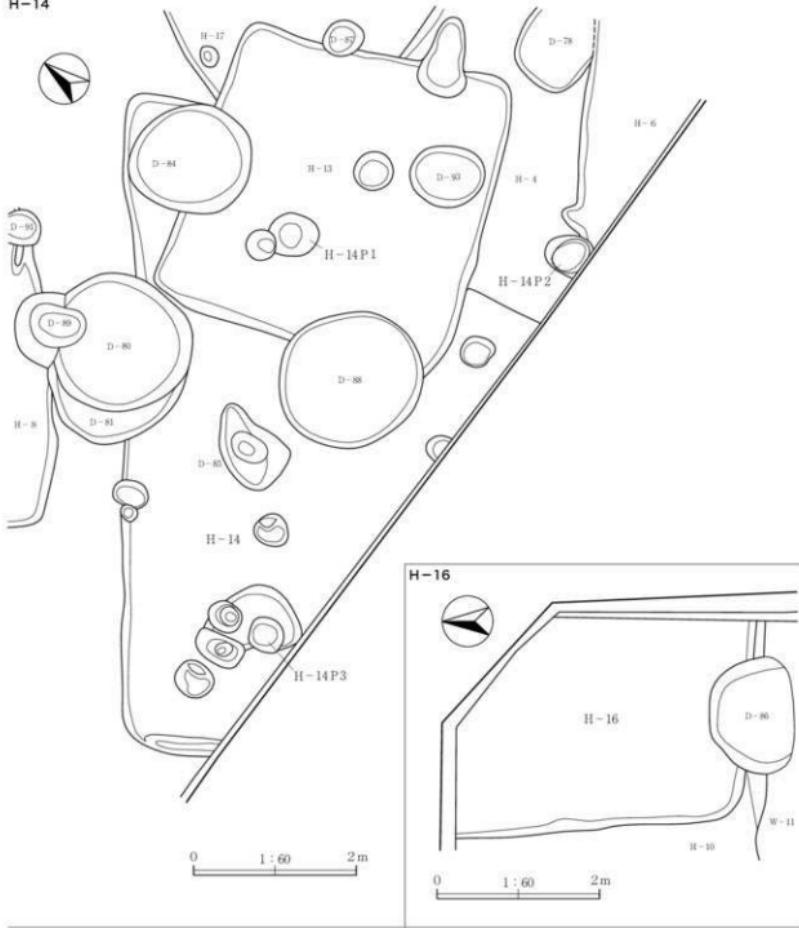


Fig.14 H-10・11号住居跡

H-14



H-15

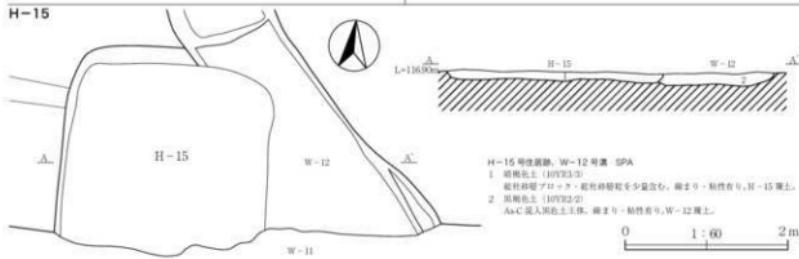
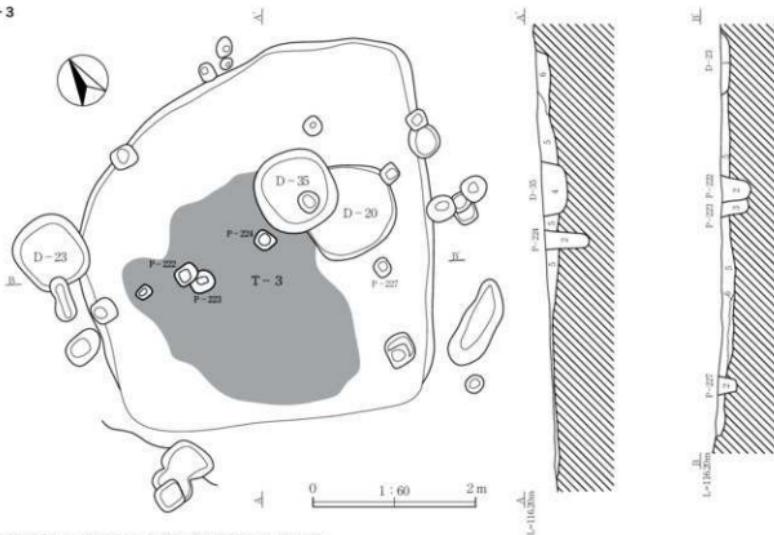
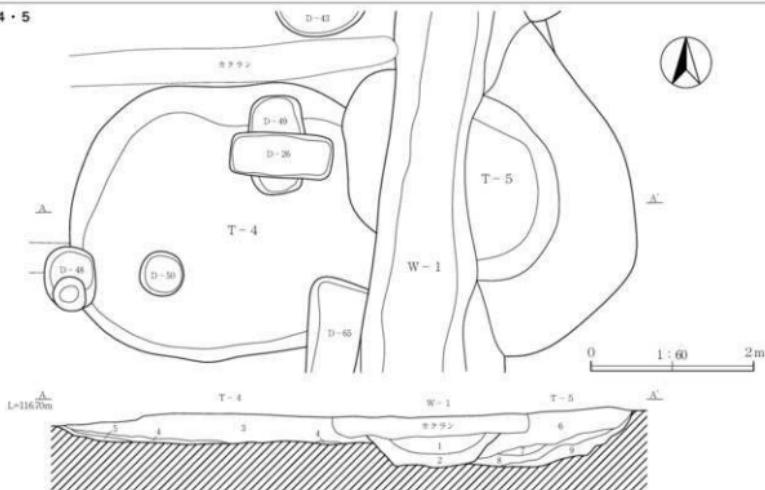


Fig.15 H-14 ~ 16 号住居跡

T-3



T-4・5



T-4・5号堅穴造構。W-1号測定 SPA

- 1 希陶瓦土 (10YR3/3) 粒状物質ブロックを多量。粒状物質を少量含む。縮まり・粘性有り。W-1 壁土。
- 2 希陶瓦土 (10YR3/3) 粒状物質を少量含む。縮まり・粘性有り。W-1 壁土。
- 3 希陶瓦土 (10YR3/3) 粒状物質を少量含む。Aa-C 黑色土を微量含む。縮まり・粘性有り。T-4 壁土。
- 4 希陶瓦土 (10YR2/2) Aa-C 黑色土を少量。粒状物質ブロックを微量含む。縮まり・粘性有り。T-4 壁土。
- 5 希陶瓦土 (10YR2/2) 粒状物質ブロックを多量。Aa-C 黑色土を少量含む。縮まり・粘性有り。T-4 壁土。
- 6 希陶瓦土 (10YR3/3) Aa-B 土を少量含む。縮まり・粘性有り。T-5 壁土。
- 7 希陶瓦土 (10YR3/3) 粒状物質ブロックを微量含む。縮まり・粘性有り。T-5 壁土。
- 8 黑色土 (10YR2/2) Aa-C 黑色土・粒状物質ブロックを微量含む。
- 9 黑色土 (10YR2/2) Aa-C 黑色土を多量。粒状物質ブロックを微量含む。
- 10 黑色土 (10YR2/2) Aa-C 黑色土を微量。粒状物質ブロックを微量含む。

Fig.16 T-3～5号堅穴造構

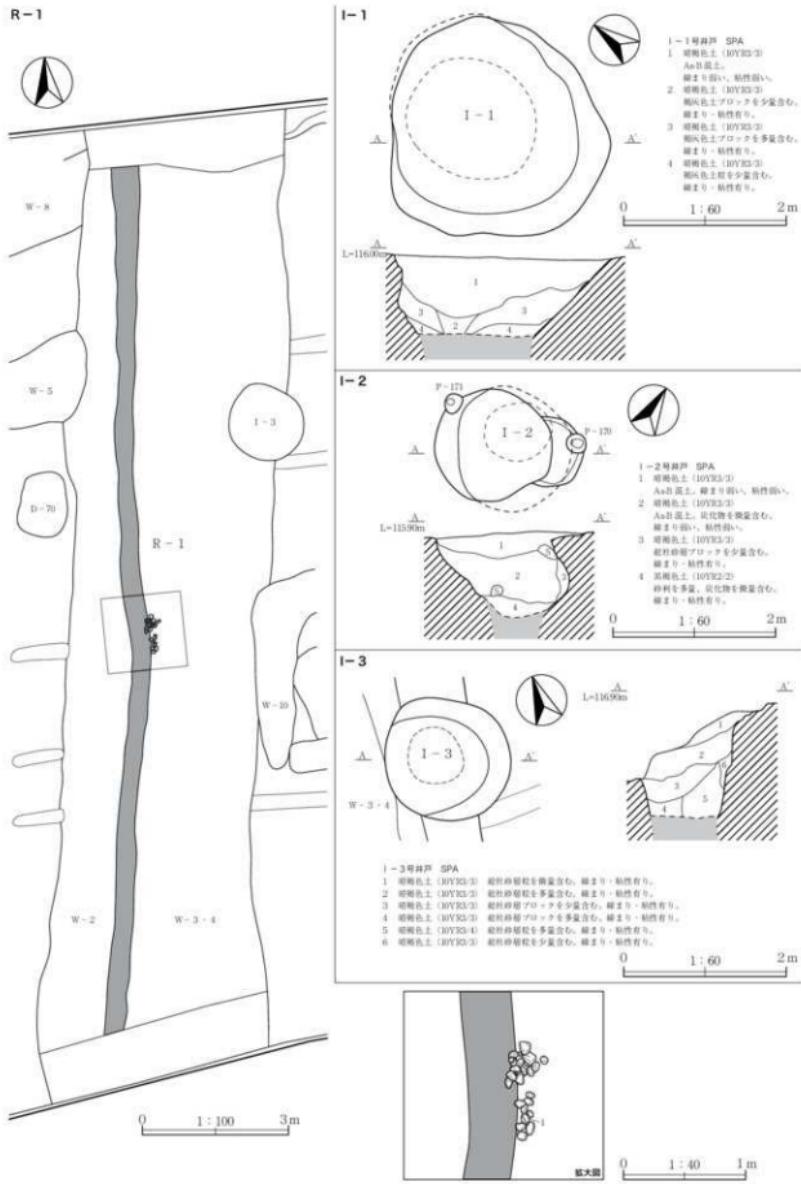


Fig.17 R-1号道路状遺構、I-1～3号井戸

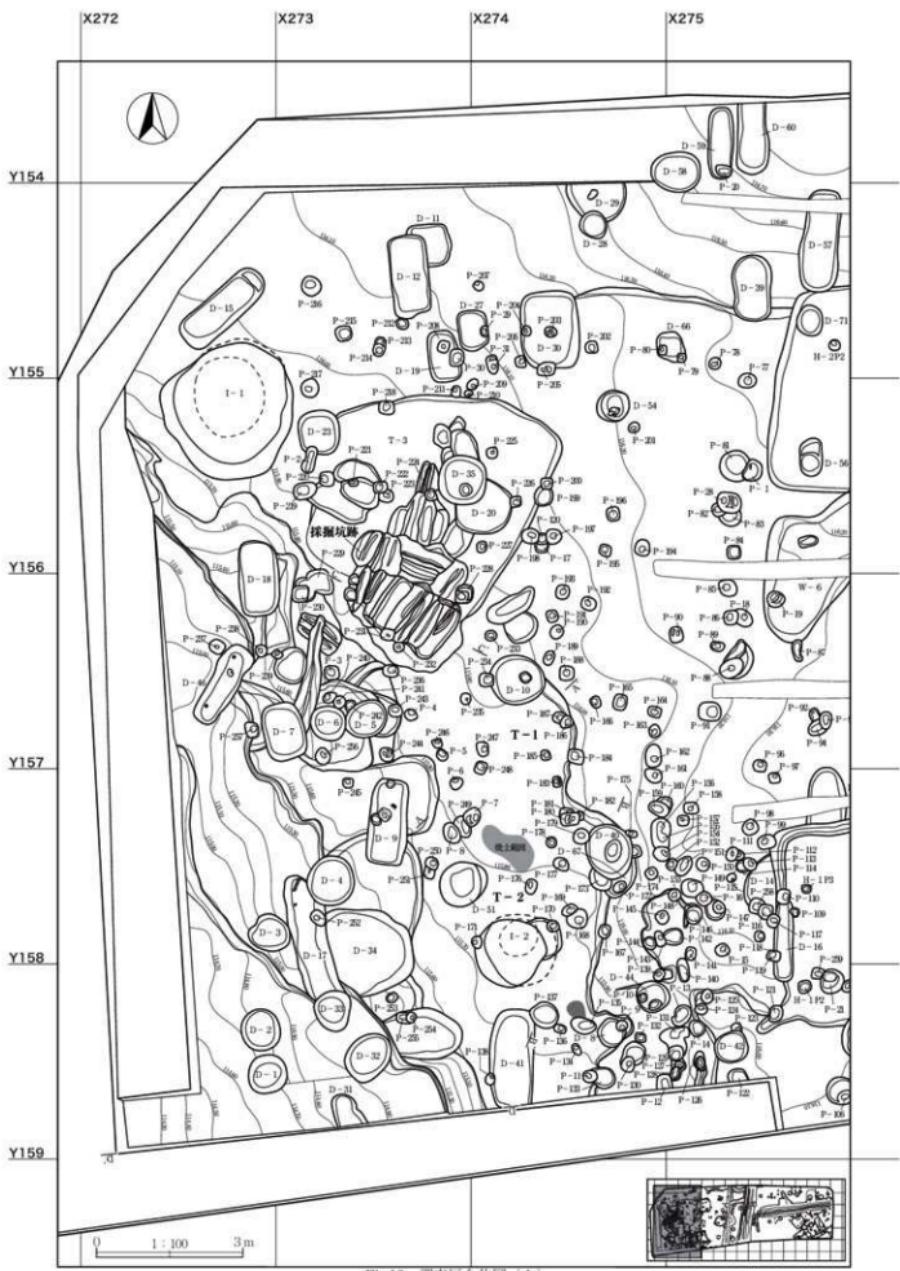


Fig.18 調査区全体図 (1)

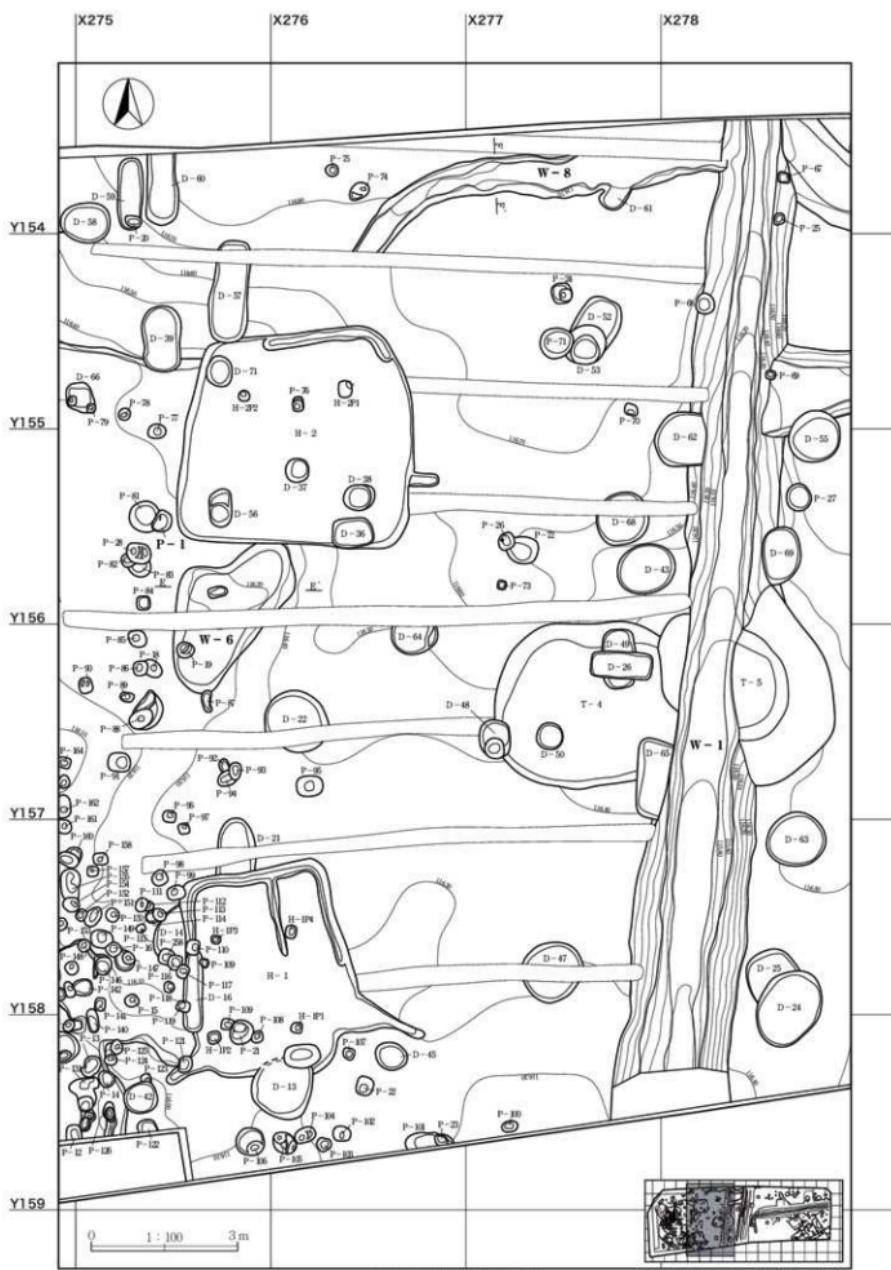


Fig.19 調査区全体図 (2)

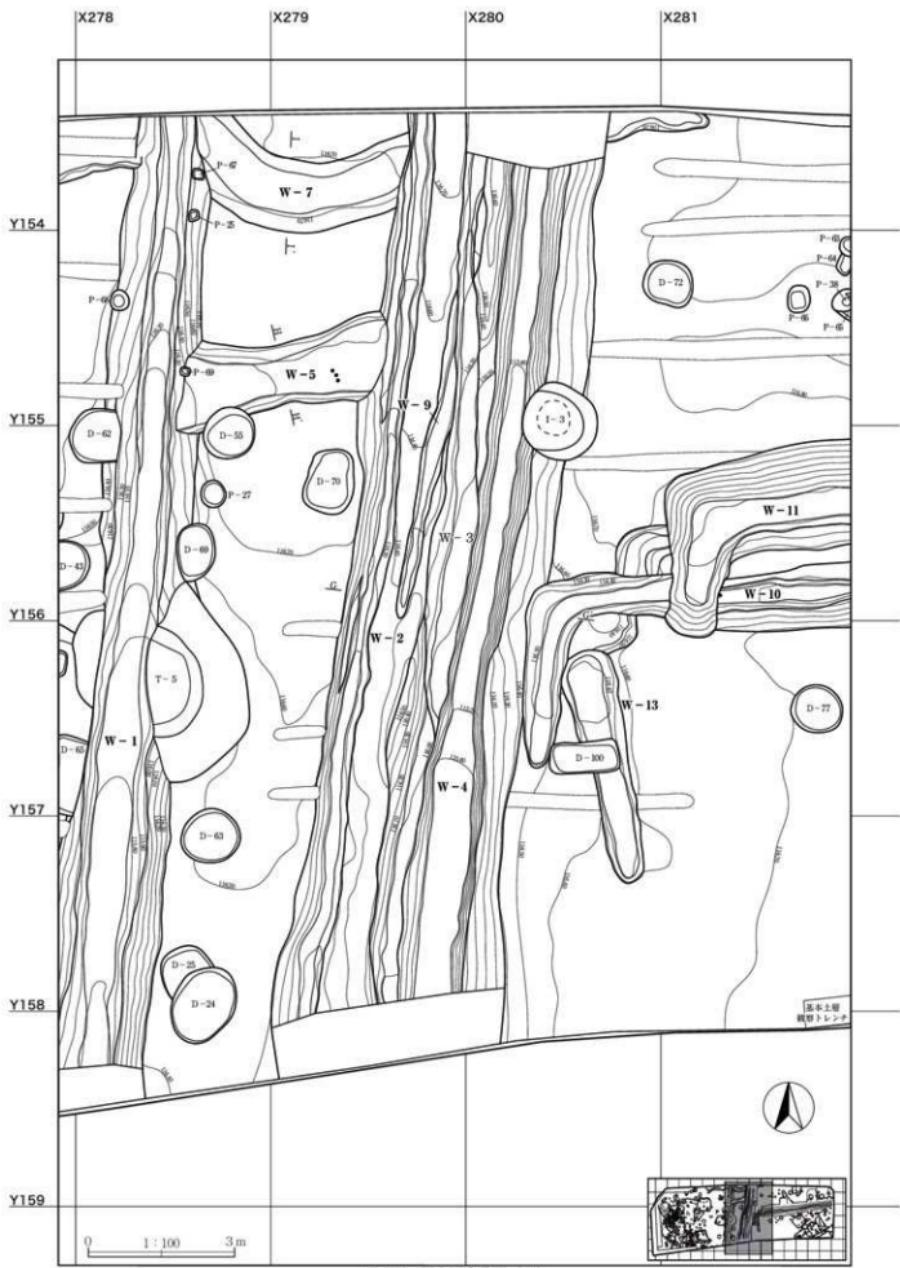


Fig.20 調査区全体図 (3)

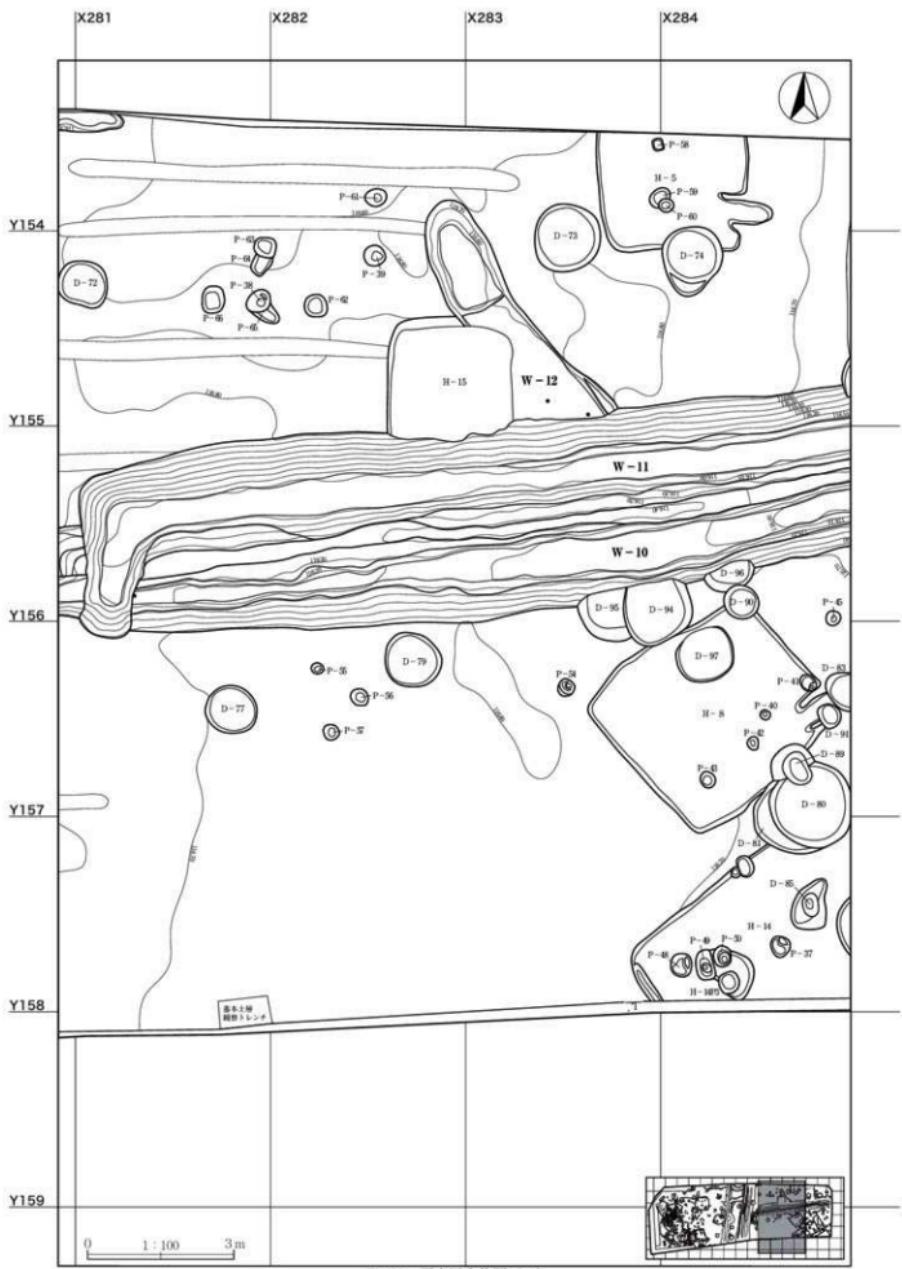


Fig.21 調査区全体図 (4)

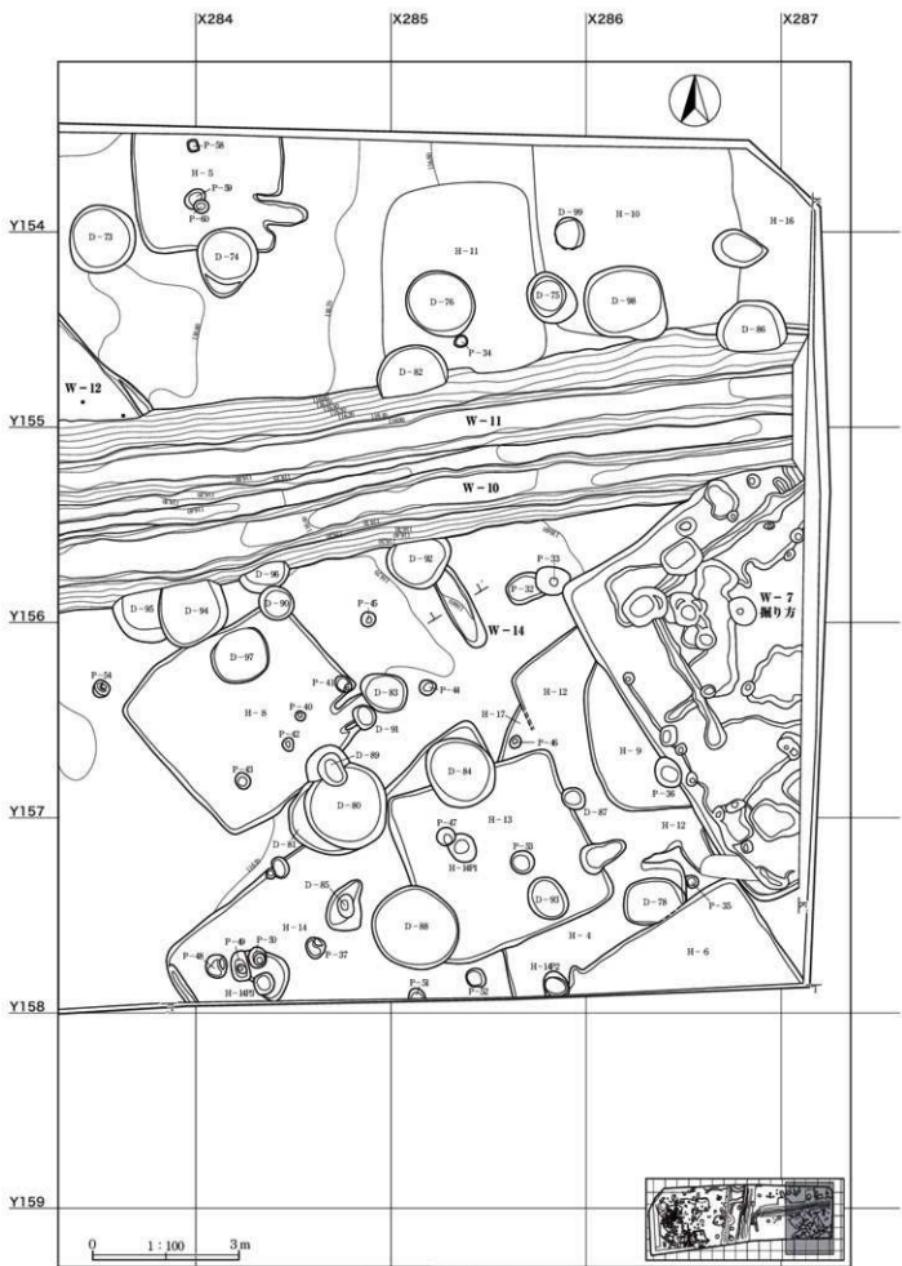
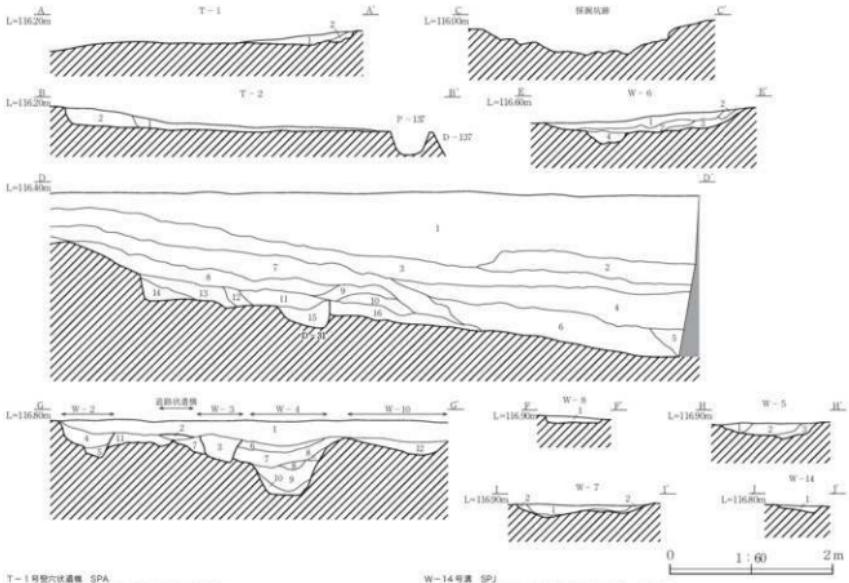


Fig.22 調査区全体図 (5)



T-1号井六块状带 SP

- 1 黑褐色土。(10Y3C-5) As-B层土。砾多り、粘性有利。
- 2 黑褐色土。(10Y3C-5) As-B层土。砾粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- T-2号井斜孔构造 SPB
- 1 黑褐色土。(10Y3C-5) As-B层土。砾多り、粘性有利。
- 2 黑褐色土。(10Y3C-5) As-B层土。砾粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 3 黑褐色土。(10Y3C-5) As-B层土。砾粒砂層 SPD
- 1 黑褐色土。(1) 砂粒砂層ブロックを多量含む。砾多り、粘性有利。
- 2 黑褐色土。(10Y3C-4) 砂粒砂層ブロックを多量含む。砾多り、粘性有利。
- 3 黑褐色土。(10Y3C-3) As-B层土。化成物を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 4 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土。化成物を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 5 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 6 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 7 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土。砾粒砂層を少量化する。砾多り、粘性やや弱い。
- 8 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 9 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 10 黑褐色土。(10Y3A-6) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 11 黑褐色土。(10Y3A-6) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 12 黑褐色土。(10Y3C-2) 化成物を少量含む。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。
- 13 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 14 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 15 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 16 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。D-31 层土。

W-6号井 SPE

- 1 黑褐色土。(10Y3C-4) 砂粒砂層ブロックを多量含む。砾多り、粘性有利。
- 2 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。
- 3 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。
- 4 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 5 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。W-2 层土。
- 6 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロック(薄黄色)を少量含む。砾多り、粘性有利。W-2 层土。
- 7 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロック(薄黄色)を少量含む。砾多り、粘性有利。W-2 层土。
- 8 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。W-2 层土。
- 9 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。W-2 层土。
- 10 黑褐色土。(10Y3A-6) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 11 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土。砾粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- 12 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。
- W-14号井 SPJ
- 1 黑褐色土。(10Y3C-2) As-C 多量含む。砾多り、粘性有利。
- 调査区域図 SPK
- 1 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾多り、粘性やや弱い。
- 2 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 3 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 4 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 5 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 6 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層ブロックを少量含む。
- 7 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 8 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 9 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層を少量含む。砾多り、粘性やや弱い。
- 10 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾粒砂層を少量含む。As-C 层土を微量含む。
- 11 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。成層物を微量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 12 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 13 黑褐色土。(10Y3C-2) As-B层土全体。砾多り、粘性やや弱い。W-11 层土。
- 14 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 15 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 16 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層ブロックを少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 17 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 18 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 19 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 20 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 21 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾多り、粘性有利。W-11 层土。
- 22 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を少量含む。砾粒砂層ブロックを少量含む。
- 砾多り、粘性やや弱い。H-7 层土。
- 23 黑褐色土。(10Y3C-2) 砂粒砂層を多量含む。砾多り、粘性やや弱い。H-7 层土。

Fig23 遺構断面図 (1)

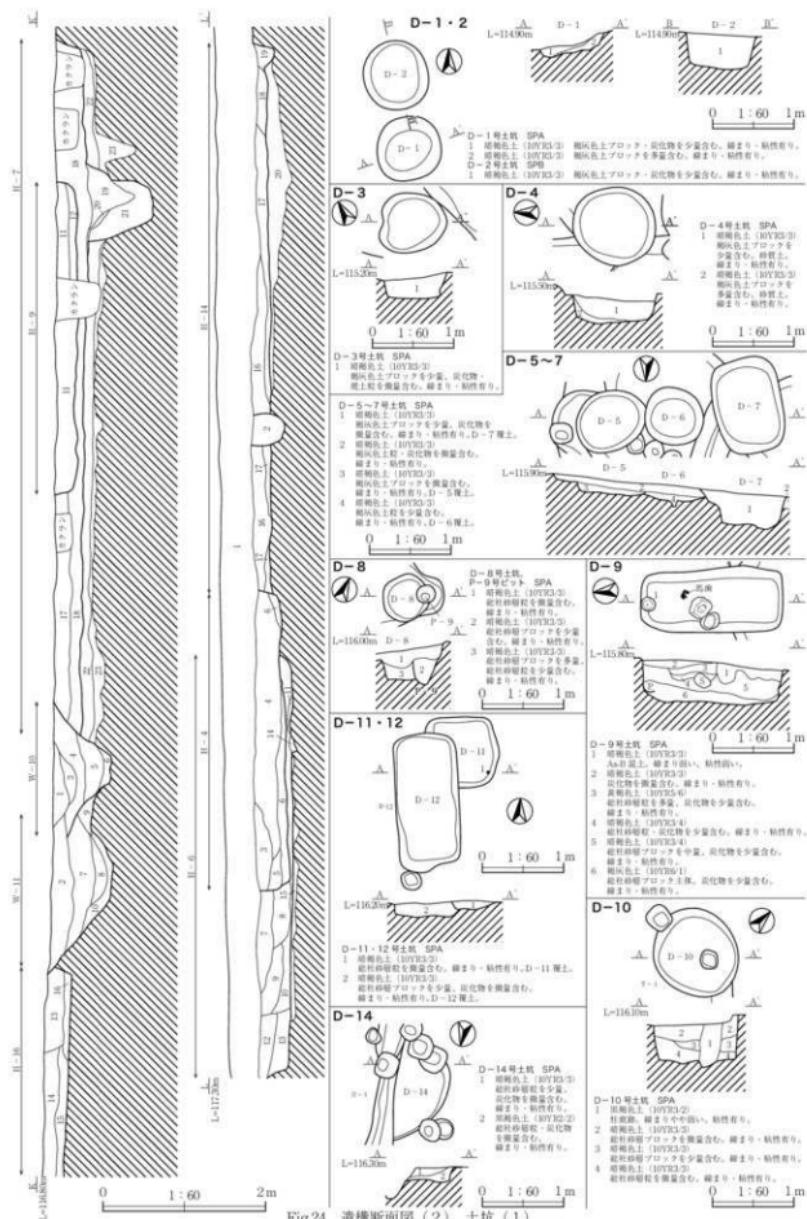


Fig.24 遺構断面図 (2)、土坑 (1)

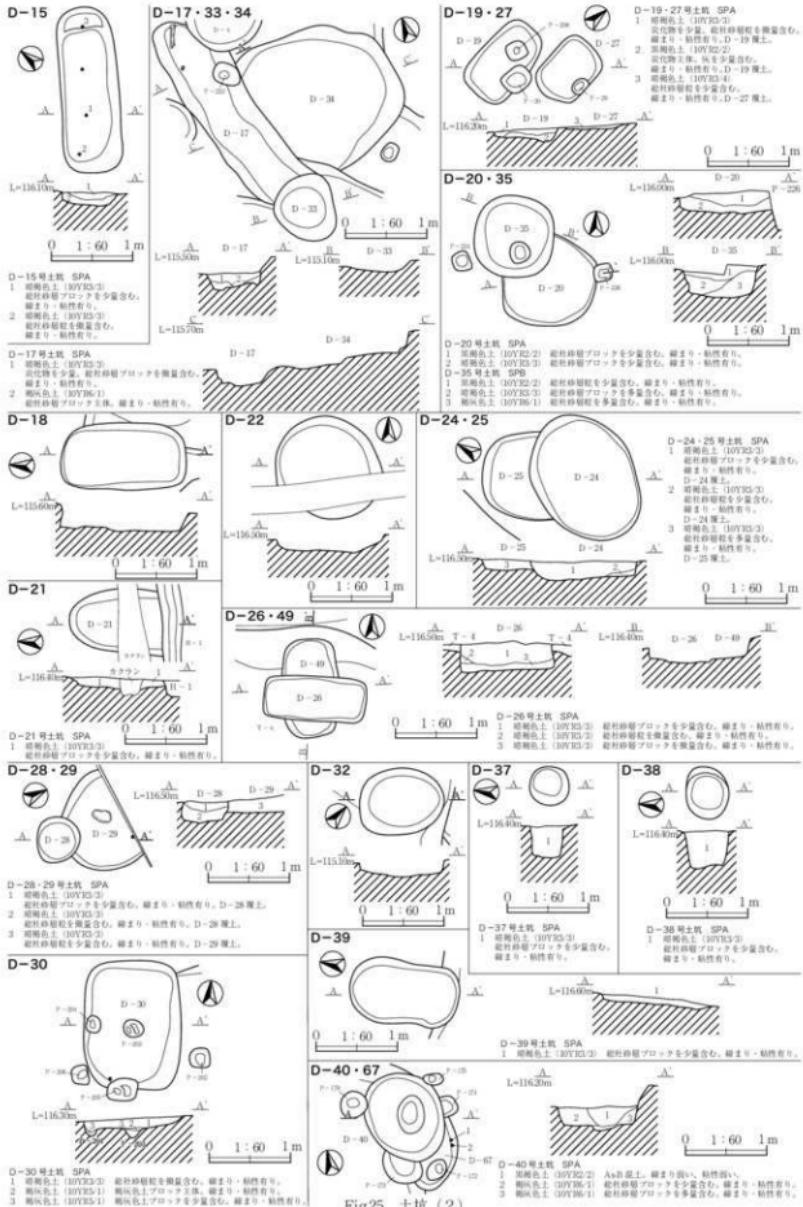


Fig25 土坑 (2)

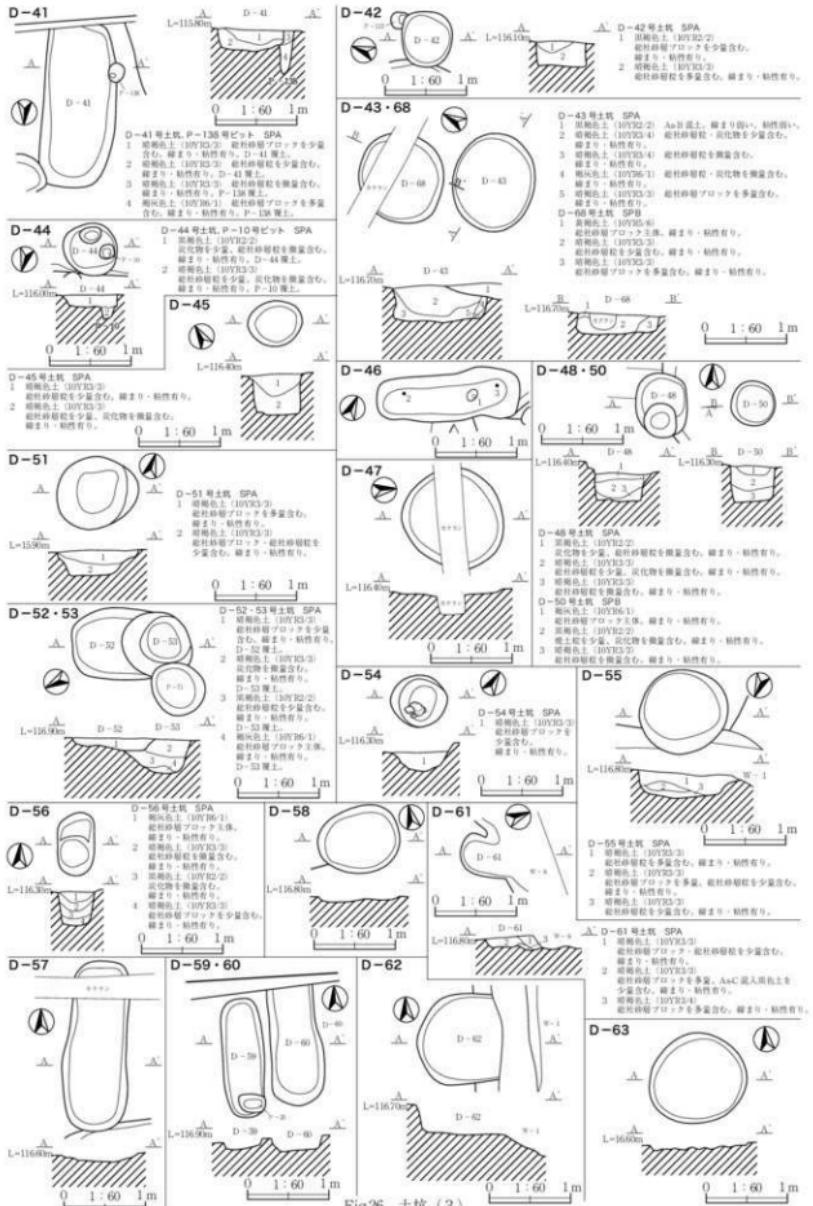


Fig.26 土坑 (3)

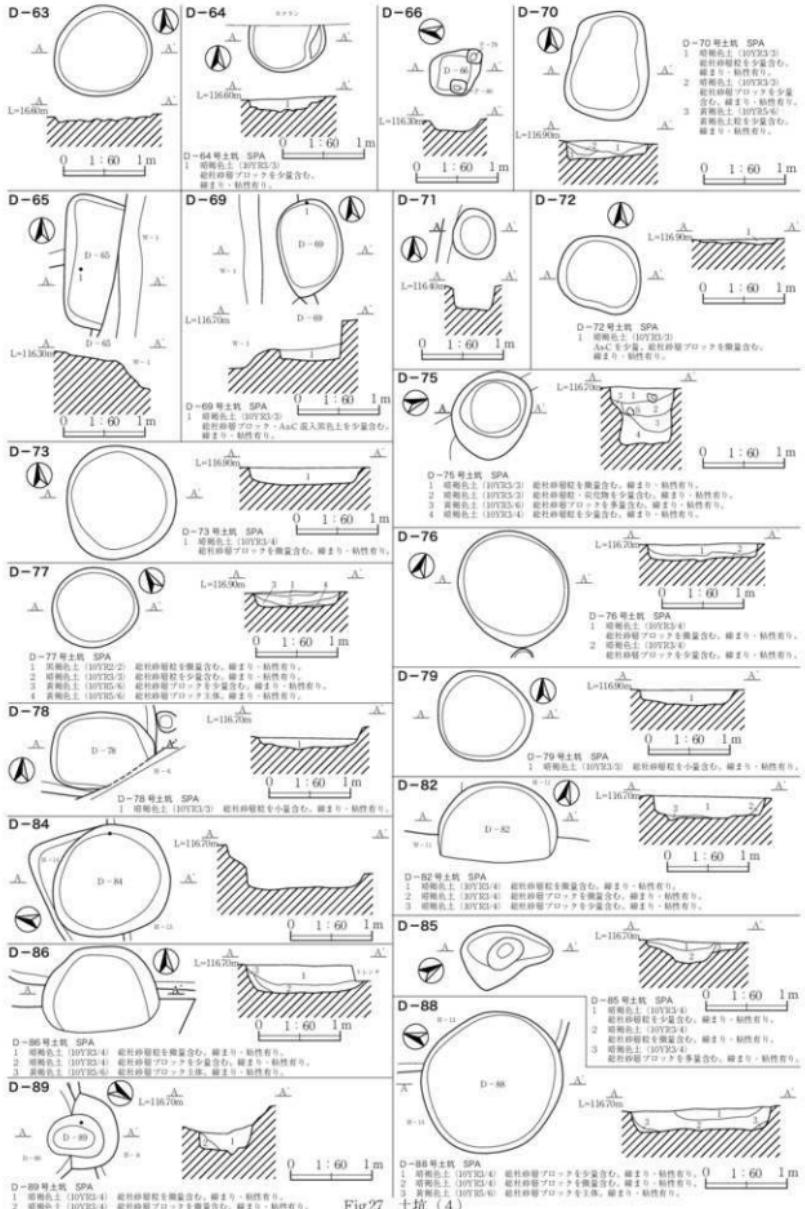


Fig.27

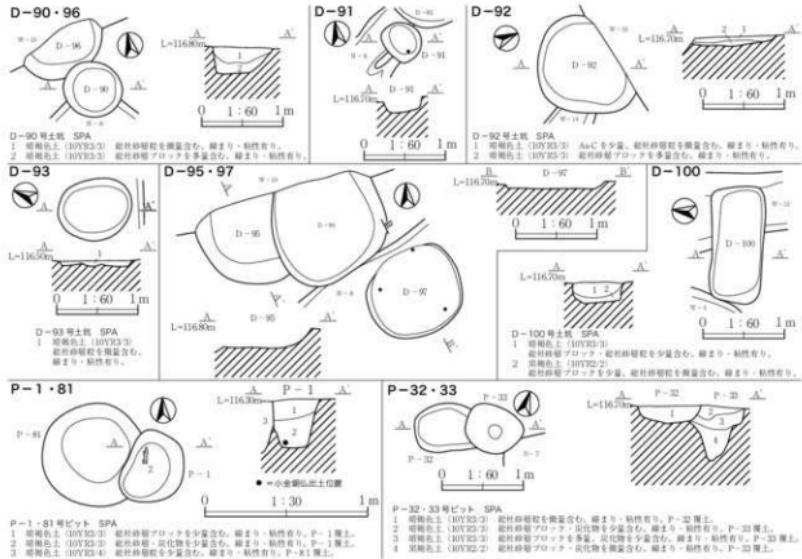
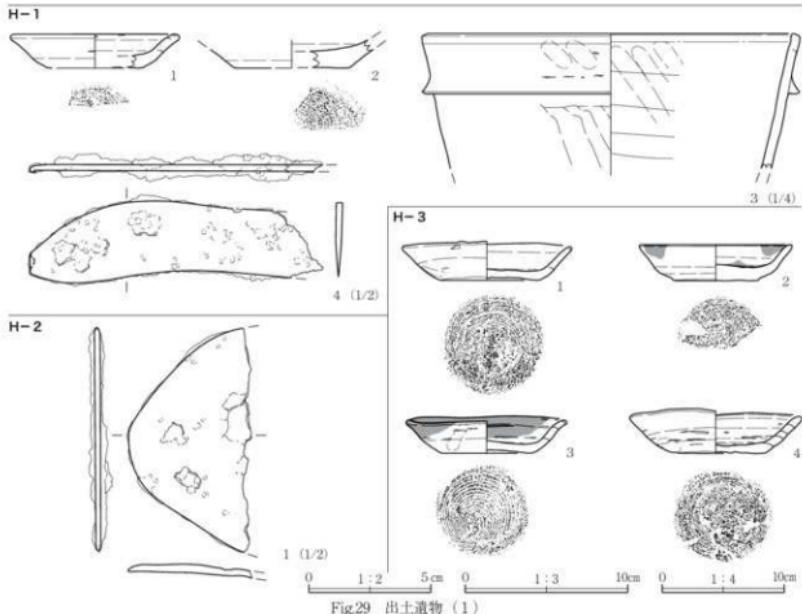
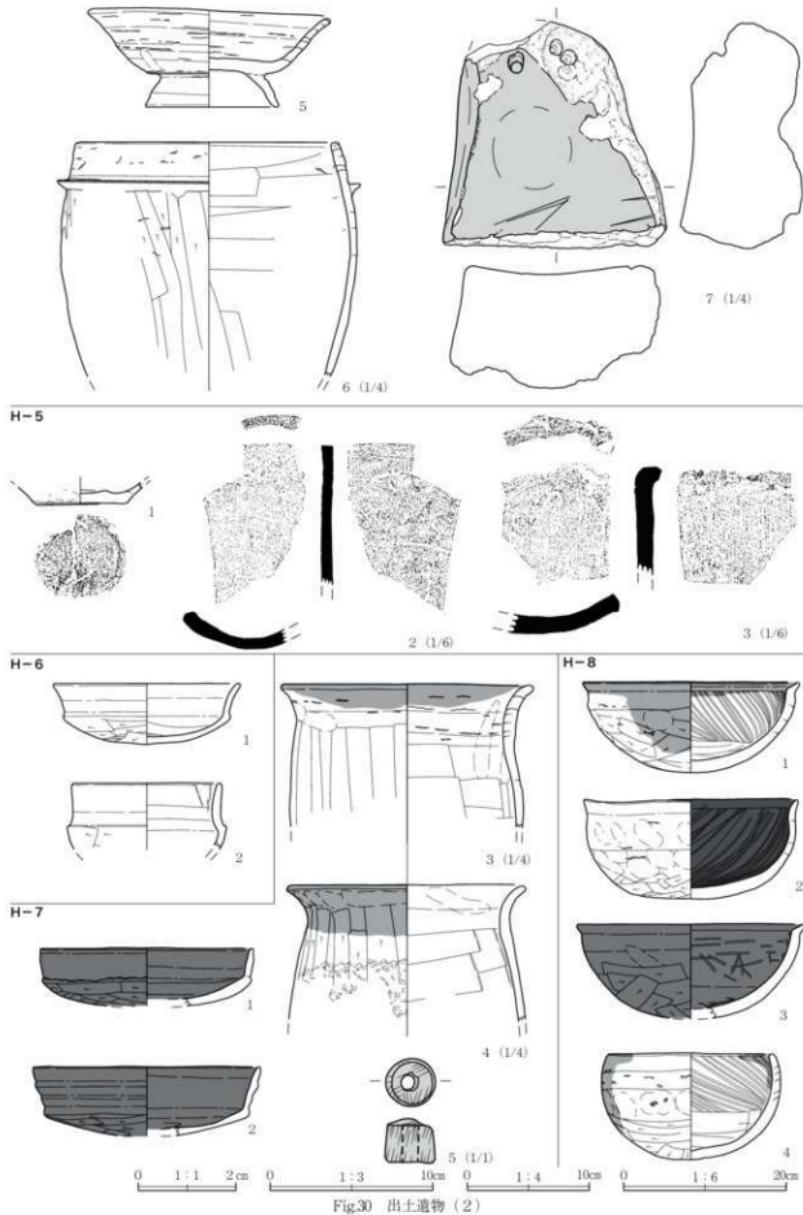
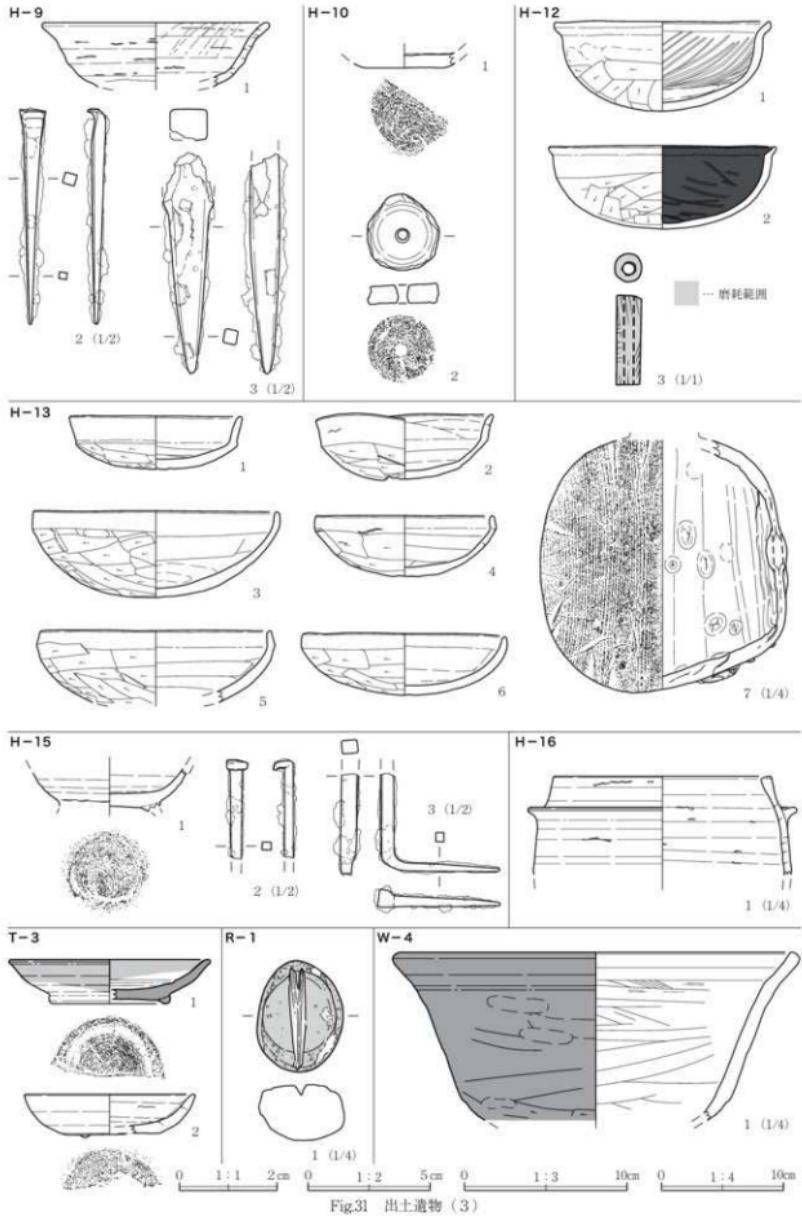
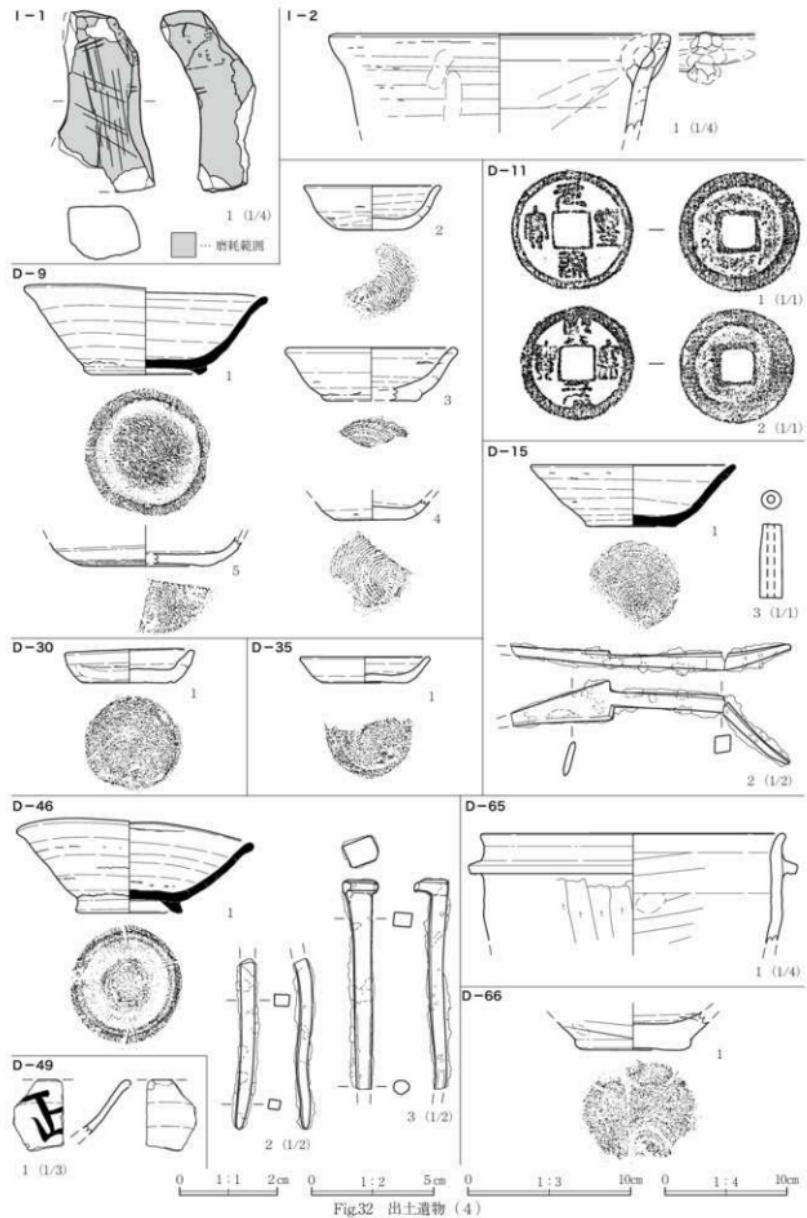


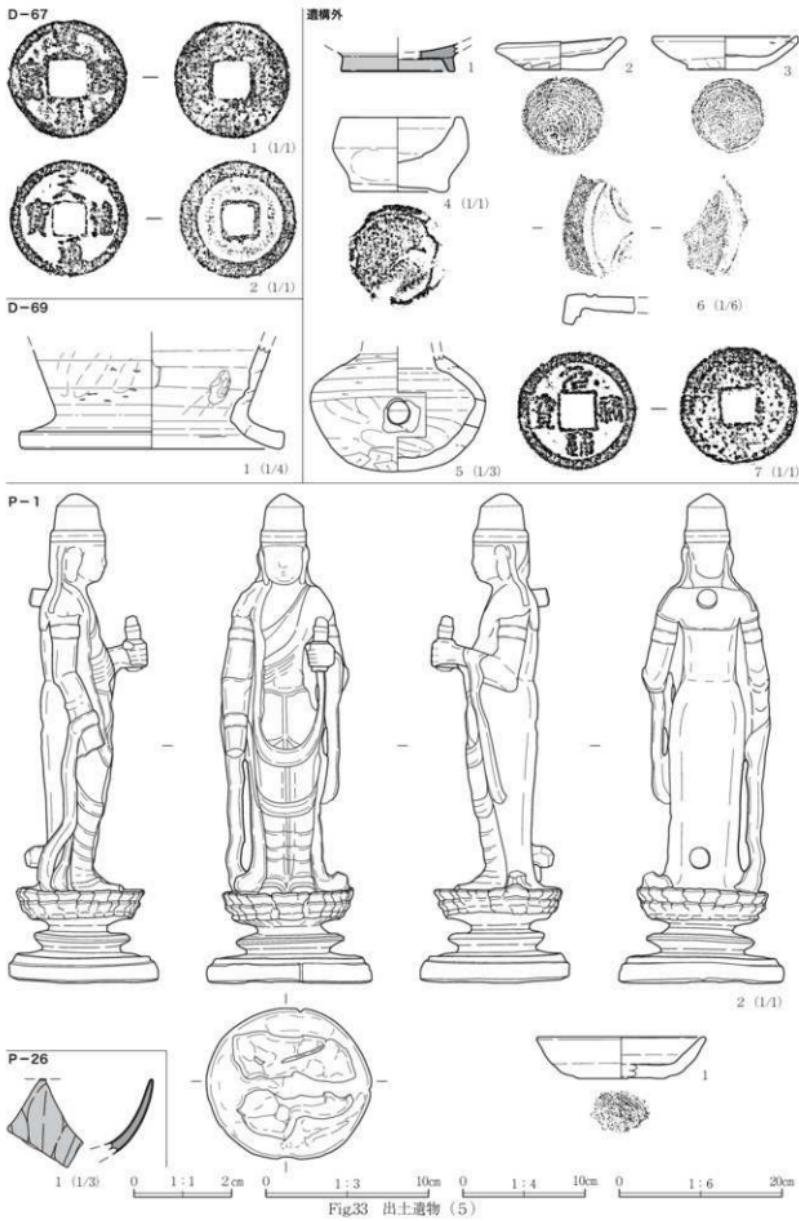
Fig.28 土坑(5)、ピット

















道樋名	グリッド	表幅 (m)	規則 (m)	深さ (m)	平面形状	備考	道樋名	グリッド	表幅 (m)	規則 (m)	深さ (m)	平面形状	備考
P - 161	X274, Y157	0.28	0.11	0.25	方形		P - 221	X275, Y155	0.18	0.14	0.12	方形	
P - 162	X274, Y157	0.16	0.09	0.24	円形		P - 222	X275, Y155	0.28	0.22	0.23	方形	
P - 163	X274, Y157	0.22	0.17	0.11	方形		P - 223	X275, Y155	0.30	0.26	0.22	方形	
P - 164	X274, Y156	0.33	0.28	0.19	方形		P - 224	X275, Y155	0.24	0.22	0.41	方形	
P - 165	X274, Y156	0.22	0.19	0.12	方形		P - 225	X274, Y155	0.23	0.22	0.37	円形	
P - 166	X274, Y156	0.28	0.22	0.35	円形		P - 226	X274, Y155	0.23	0.21	0.58	方形	
P - 167	X274, Y156	0.24	0.16	0.17	円形		P - 227	X274, Y155	0.22	0.19	0.29	方形	
P - 168	X274, Y156	0.30	0.28	0.35	方形		P - 228	X275 - 274, Y156	0.38	0.35	0.65	方形	
P - 169	X274, Y156	0.30	0.20	0.25	複円形		P - 229	X275, Y155 - 156	0.60	(0.51)	0.16	不整形	
P - 170	X274, Y156	0.28	0.25	0.30	円形		P - 230	X275, Y156	0.32	0.31	0.39	方形	
P - 171	X274, Y156	0.24	0.22	0.20	方形		P - 231	X275, Y156	0.27	0.23	0.45	円形	
P - 172	X274, Y156	0.31	0.36	0.16	方形		P - 232	X275, Y156	0.21	0.18	0.18	円形	
P - 173	X274, Y156	0.29	0.27	0.25	方形		P - 233	X274, Y156	0.24	0.21	0.11	円形	
P - 174	X274, Y155	0.32	0.29	0.06	円形		P - 234	X274, Y156	0.28	0.26	0.27	方形	
P - 175	X274, Y155	0.24	0.22	0.15	方形		P - 235	X275, Y156	0.21	0.20	0.24	円形	
P - 176	X274, Y155	0.28	0.26	0.42	方形		P - 236	X275, Y156	0.32	0.26	0.69	円形	
P - 177	X274, Y155	0.33	0.39	0.38	円形		P - 237	X272, Y156	0.32	0.26	0.25	方形	
P - 178	X274, Y155	0.36	0.30	0.41	円形		P - 238	X272, Y156	0.25	0.22	0.14	円形	
P - 179	X274, Y155	0.38	0.34	0.22	円形		P - 239	X272 - 273, Y156	0.21	0.17	0.15	方形	
P - 180	X274, Y155	0.25	0.22	0.45	方形		P - 240	X273, Y156	0.28	0.22	0.07	円形	
P - 181	X274, Y155	0.23	0.29	0.22	円形		P - 241	X273, Y156	0.26	(0.23)	0.03	円形	
P - 182	X274, Y154	0.25	0.23	0.19	方形		P - 242	X273, Y156	0.21	(0.17)	0.04	円形	
P - 183	X274, Y154	0.24	0.21	0.24	方形		P - 243	X273, Y156	0.27	0.24	0.39	円形	
P - 184	X274, Y154	0.21	0.17	0.10	方形		P - 244	X273, Y156	0.28	0.28	0.04	円形	
P - 185	X274, Y154	0.37	0.28	0.51	円形		P - 245	X273, Y156	0.21	0.19	0.18	方形	
P - 186	X274, Y154	0.24	0.19	0.58	方形		P - 246	X273, Y156	0.18	0.18	0.12	方形	
P - 187	X274, Y154	0.21	0.18	0.54	円形		P - 247	X274, Y157	0.29	0.23	0.35	方形	
P - 188	X273, Y154	0.25	0.21	0.47	方形		P - 248	X274, Y156 - 157	0.27	0.23	0.15	方形	
P - 189	X273 - 274, Y155	0.22	0.19	0.29	複円形		P - 249	X273 - 274, Y157	0.44	(0.20)	0.22	複円形	
P - 190	X273 - 274, Y155	0.16	0.14	0.25	複円形		P - 250	X273, Y157	0.27	0.23	0.23	方形	
P - 191	X273, Y155	0.22	0.18	0.26	方形		P - 251	X273, Y157	0.21	(0.20)	0.23	方形	
P - 192	X273, Y154	0.22	0.21	0.20	方形		P - 252	X273, Y157	0.35	0.24	0.24	方形	
P - 193	X273, Y154	0.25	0.23	0.19	方形		P - 253	X273, Y157	0.22	0.20	0.15	円形	
P - 194	X273, Y154	0.21	0.17	0.10	方形		P - 254	X273, Y158	0.21	0.18	0.45	円形	
P - 195	X273, Y154	0.37	0.28	0.51	円形		P - 255	X273, Y158	0.21	(0.21)	0.13	方形	
P - 196	X274, Y154	0.24	0.19	0.58	方形		P - 256	X273, Y156	0.32	0.28	0.37	円形	
P - 197	X274, Y154	0.21	0.18	0.54	円形		P - 257	X272, Y156	0.32	0.24	0.24	方形	
P - 198	X273, Y154	0.25	0.21	0.47	方形		P - 258	X275, Y157	0.33	(0.20)	0.43	方形	
P - 199	X273, Y155	0.16	0.14	0.25	複円形		P - 259	X275, Y158	0.23	0.21	0.34	方形	
P - 200	X273, Y155	0.30	0.29	0.51	方形								







## VI まとめ

### 1 遺跡の概観

本遺跡で検出された住居跡は5世紀後半から11世紀前半までの計17軒である。H-1・2を除くそのほとんどの住居跡が調査区東側に集中する。調査区西側は牛池川の崖線にあたり、この影響を大きく受けていると考えられる。また本遺跡では8世紀代の住居跡が確認されていない。隣接する遺跡でも同様の傾向にあることから、本遺跡の西方向に推定される国府の存在に影響されていることは想像に難くない。

牛池川崖線では総社砂層の採掘が行われる。採掘坑は牛池川沿いの遺跡で多く見られ、直近では本遺跡北側の元総社蒼海遺跡群（9）（10）W-1の斜面部で確認（10世紀以降と推定）されている。採掘はT-3との重複関係から10世紀以前から開始されたと推測される。牛池川へと下る斜面部に平場を作り出した堅穴状遺構（T-1～3）はカマドが存在しない、土器の出土量が極めて少ないとから、採掘の際に使用されていた作業場であったのかもしれない。採掘場としての役割を終えたこの場所は、集落からやや離れて人目に付かないことから墓域として使用されたと考えられる。土壤墓であるD-67のみで覆土中にAs-Bの堆積がみとめられ、他の土壤墓では確認されていないため、12世紀以降は墓域として使用されなくなったと想定される。

中世になると牛池川崖線に柱穴が集中して分布し、建物・柵等の施設が想定される。調査区中央から東側の溝・堀跡は屋敷地を区画する堀と想定され、この堀や井戸から15世紀代の内耳土器が出土している。本遺跡の東側に位置する閑泉橋南遺跡では本遺跡W-10・11の東側延長部分と考えられる溝（1号溝）が検出され、溝からは内耳土器・銅鏡（14世紀か）が出土している。本遺跡周辺には蒼海城時代に存在した屋敷が存在していた可能性が考えられる。

### 2 小金銅仏<sup>(1)</sup>

#### 小金銅仏の特徴

高10.0cm、像高8.2cm、台座高1.8cm、重さ144.4g。鋳銅一鑄。湯口は瓶座（台座）裏、前後合わせ型を用いて造像されたと考えられる。光背と右手先、左手から垂れ下がる天衣と持物の一部が欠損している。姿勢（側面形）は直立している。

頭には宝冠を被り、頭頂部は山状に膨らむ。額には鉢巻のように天冠台を2段に造る。頭上には化仏はみられない。額の表現は明瞭ではないが、僅かに残る鼻・口元や全体の様相からやわらかい表情の印象を受ける。両耳の表現も明瞭ではないが、耳たぶが首元まで及んでいる。両耳の後ろには垂髪が肩まで垂れ下がる。

左手は肘を曲げ、持物を握る様に表現されている。持物は上部に膨らみを持つ。握手より下は欠損していると考えられる。持物自体は棒状を呈しており杖や水瓶・独鈷杵等が想定されるが、杖であれば足元の蓮内に欠損した痕跡が残ると考えられるが確認できず。水瓶は注ぎ口の形状がやや異なるため違うであろうし、独鈷杵にしても同様である。持物の種類に関しては今後検討しなければならない。右手は体に沿って垂下し、手首より先是欠損している。左右上腕には臂輪（腕輪）とみられる膨らみがみられる。

上半身には衲衣を左肩のみに覆い、右肩を肩脱ぎにしている（偏袒右肩）。腹部はやや膨らみ、衣文線（衣装の襞表現）が表現されている。衲衣の上には天衣（ショールのようなもの）がかけられている。天衣は両肩にまわし、両端を前面に垂らす。垂れ下げられた衣は腰上で並行するように弧をつくり、両前腕部にかけられ外側から蓮華座へと垂れ下げる。左側は一部欠損。背中には両肩にかかる天衣が表現されている。腰上がやや括れる。光背を支持するための柄が背中上位とふくらはぎの部分の2箇所に鋲出されている。腰には石帶（腰紐）が巻かれ、股下から足元まで紐が垂れ下がる。腰より下は袴で包まれ、垂れ下がる衣文線が表現されている。裾は

足の甲半ばを覆い、両足は揃っている。

台座上部には蓮華座を設け、連弁は三重の葺き寄せとしている。蓮華座の下には円盤状の意匠（花盤）<sup>(1)</sup>が、最下段には円形二段の框座が付く。框座正面に縱方向の傷が見られる。

以上の特徴から平安時代の小金銅仏であると考えられる。

#### 像名について

姿形・特徴から観音菩薩立像に分類されると推測されるが、菩薩であれば頭に化仏（本地仏を示すために頭上に置く小型の仏像）を配するのが常である。しかし本像には化仏の表現が見られない。<sup>(2)</sup>菩薩ではなく天部である可能性も考えられる。<sup>(3)</sup>

#### 小金銅仏の出土状況

P-1 の覆土は上下 2 層に分けることができ、暗褐色土に総社砂層ブロックを少量含む土層を基本としている。小金銅仏が出土した下層は炭化物粒を含んでおり、小金銅仏の周囲にも炭化物が散っている事が確認できる（巻頭図版 2 参照）。共伴する須恵器環も 2 層土から出土している。小金銅仏は頭を北に向かって、うつ伏せの状態で確認された。

小金銅仏が出土している他の遺跡の事例をいくつか挙げてみたい。常見遺跡（栃木県足利市）の 11 号住居跡（9 世紀第 2・3 四半期）は焼失家屋として確認されており、この住居跡内から小型仏像（銅造如来立像）が出土している。小型仏像以外の出土遺物は土器の小破片のみと生活の痕跡が少ない。このことから住居使用中に火災に遭って逃げる→仏像を運び出す間がなく残されたのではなく、計画的に住居跡を廃絶するための祭祀的な意味で仏像を安置（埋納）し住居と一緒に燃やした可能性が高いと報告されている（足利市 1998）。住居の廃絶行為に際して安置（埋納）された仏像と考えられる。

下り松遺跡（茨城県結城市）の第 28 A 号住居跡（9 世紀末）からは西壁際中央から 2 体の小金銅仏（地蔵菩薩立像、聖観音菩薩立像）が共に仰向けの状態で並んで出土している（茨城県 1999）。2 体横並びに出土している状況から、流れ込み・廃棄ではなく人為的な行為→安置（埋納）されたと考えられる。住居跡廃絶に伴う祭祀行為ではないかと推測されている。

くるま橋遺跡（栃木県真岡市）SI-1（堅穴建物跡、10 世紀代）の南西壁付近の覆土中から銅造鍍金阿弥陀如来坐像が出土している。仏像が出土した土層が人為的な埋め戻しによる可能性が高いことから、堅穴建物廃絶に伴う祭祀に関連して安置（埋納）された可能性が高いと指摘している。

本遺跡から北へ約 200 m に位置する元総社舊海遺跡群（91）でも小金銅仏が確認されている。3 号堅穴住居跡（10 世紀後半から 11 世紀前半）の北壁やや西よりの床面から、頭は西に正面は住居内へと向け横たわる状態で小金銅仏（地蔵菩薩立像）が出土している。住居跡壁際から出土している点は前述の下り松遺跡と共通する。焼失等の廃絶行為の痕跡は確認されていないが、床面上直出土の点から安置（埋納）されたものと推測される。

以上のことと踏まえて本遺跡の出土状況について検討を加えてみたい。本遺跡はピットから出土しているため他の遺跡の事例（住居跡からの出土）とはやや状況が異なる。出土状態でみると、うつ伏せの状態で出土している



Fig.34 小金銅仏部位名称

事は仰向けとの違いはあるが、横たわせているという点から共通項が見出せる。出土位置はピット底面に近い高さである(Fig.28)。ピット下層にあたる2層土に炭化物粒が含まれ(周囲のピットでは確認できなかった)、薄い炭化物層の上に仏像を伏せていたような人為的な行為が想像されることから、本遺跡の小金銅仏も安置(埋納)された可能性が高いと考えられる。何に対しても安置(埋納)行為なのであろうか。安直に考えればP-1に関連する建物の廃絶行為が連想される。P-1の周囲にはピットが多数確認されているものの、柱穴の組み合わせがうまくいかず、建物跡の想定には至っていない。行為の対象については今後の検討課題となる。

小金銅仏ではないが同じ仏教関連遺物の出土事例として近隣の遺跡を2つ紹介したい。元総社蒼海遺跡群(137)2区のD-8(0.69m×0.68m深さ0.61mの土坑)からは五花鏡1面・素文鏡1面・鉄鎗・鉄鐸・銅渟・雁又鏡が出土している。土層断面の観察や出土状況(鏡2点と鉄鐸はまとまって出土)から意図的に埋納されたと考えられている。遺構年代は10世紀後半から11世紀初頭としている。遺構規模の大小はあるが遺構の形状や出土位置等、本遺跡P-1と類似する点が多い。

本遺跡から北西約400mに位置する元総社蒼海遺跡群(75街区)No.2では7世紀から11世紀にかけての集落跡が確認されており、10世紀初頭とされるH-7号住居跡は铸造遺構を伴う工房跡として調査されている。工房内からは小金銅仏(4点)、三鉛杵(2点)、銅印(1点)の鋳型が出土している。小金銅仏は総高5cm前後を測る。元総社地域において小金銅仏の铸造が行われていたことを示す重要な調査成果である。本遺跡出土の金銅仏も元総社地域で造像されたのであろうか。

#### 共伴する須恵器環

小金銅仏と共に伴する須恵器環の年代について考えてみたい。この環は仏像と同じ土層(2層)から出土しており、口径[10.4]cm、底径[5.0]cm、器高27cmを測る酸化焰焼成の小型・扁平の环、いわゆる「かわらけ状の环」である。本遺跡の南西2kmに位置する鳥羽遺跡では4世紀から11世紀までの出土遺物を25段階に時期区分している。その中で11世紀第2四半期としている23段階の須恵器環は口径10cm前後、・器高3cm程度の小型品としている。24段階(11世紀第3四半期)では口径9cm・器高2.5cm、口径10~11cm・器高2.5cm、口径8~10cm・器高1.5~2.0cmの3種類に分類している。本遺跡の須恵器環をこの分類にあてはめると、口径は両段階とも差があり見られないが、器高は2.7cmで23段階から24段階へと移行する中間にあたる。ここでは前段階の範疇と考え、出土した須恵器環を11世紀前半の所産と想定する。小金銅仏についても同様の年代を与えることができる。

#### おわりに

以上、本遺跡出土小金銅仏について検討を行った。本報告においては小金銅仏本体はその様相から銅造觀音菩薩立像とし、年代については共伴する須恵器環の年代から11世紀前半と位置付け、出土状況については何らかの行為(地鎮等)に対して安置(埋納)された可能性が高いと指摘しておきたい。

#### 註

1. 小金銅仏の特徴・出土事例については池田敏宏氏(公益財團法人とちぎ未来づくり財團埋蔵文化財センター)からご教授を賜った。
2. 「甦る光彩 関東の出土金銅仏」(埼玉県博1993)に収録されている仏像において化仏を配しない菩薩立像もいくつかみられる。化仏の表現を簡略化しているのであろうか。
3. 池田氏からのご指摘である。

Tab. 8 群馬県内出土の金銅仏（奈良・平安）

番号	遺跡名・出土地	金銅仏名	縦高(cm)	横高(cm)	重さ(g)	出土場所・備考
1	元経社舊海道跡群(145)	觀音菩薩立像	100	8.2	144.4	P-1
2	開根櫛ヶ沢遺跡	觀音菩薩立像	61	5.1	-	住居跡・三尊の左脇侍
3	元経社舊海道跡群(91)	地藏菩薩立像	650	520	58.0	住居跡
4	山王庵寺	地藏菩薩立像	720	618	112.6	推定南西回廊のやや南付近
5	巖山遺跡	地藏菩薩立像	722	554	-	寺院跡の平坦面
6	旧吉井町片山	地藏菩薩立像	559	447	-	所有者の畠内・20と共に発見
7	有馬条理Ⅱ遺跡	地藏菩薩立像	647	550	-	土坑
8	有馬条理Ⅱ遺跡	天王立像	592	445	-	大溝
9	有馬条理遺跡	天部立像	590	530	43.1	遺構確認中
10	宇道遺跡	女神坐像	459	296	-	健石建物範囲内・経軸が共伴
11	旧宮城村 白草庵寺	宝冠阿彌陀如來坐像	708	428	-	白草庵寺跡の範囲内
12	上野国分寺・尼寺中間地域	男神立像	528	481	31.6	住居跡に近接する地点
13	八幡塚古墳(保渡田古墳群)	男神立像	830	761	-	八幡塚古墳
14	薬師塚古墳(保渡田古墳群)	菩薩半跏像	518	381	-	伝薬師塚古墳
15	劍崎船塚遺跡	男神立像	710	66	65.4	住居跡・16と同一住居跡
16	劍崎船塚遺跡	男神立像	620	56	58.2	住居跡・15と同一住居跡
17	宿大類町宇村西遺跡	天王立像	531	-	-	大類城址
18	旧吉井町 神保古墳群	薬師如來立像	474	380	-	石室内
19	旧吉井町 辛科神社の北	天部立像	598	482	-	伝辛科神社の北
20	旧吉井町片山	如來立像	595	482	-	所有者の畠内・6と共に発見

(前橋市 2015) を一部改変

## 引用・参考文献

## 図録・書籍

西村公朝 1976 「仏像の再発見－鑑定への道」 吉川弘文館

山崎一 1978 「群馬県古墳墓跡の研究 上巻」 群馬県文化事務振興会

鷲尾泰光 1987 「日本の美術」 金銅仏 至文堂

埼玉県立博物館 1993 「甦る光彩 関東の出土金銅仏」

真鍋俊照 2004 「日本仏像辞典」 吉川弘文館

村田清子 2004 「小金銅仏の魅力－中国・韓半島・日本－」 里分出版

中村浩一 2019 「権杖の形式論歴検討－東海の空跡出土資料を中心として－」『Mie history』 Vol.26 三重歴史文化研究会

## 発掘調査報告書

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986 「関東攝南道路」

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 「鳥羽遺跡 I・J・K区」

足利市教育委員会 1998 「2常見遺跡」『平成8年度 文化財保護年報』

(財) 茨城県教育財団 1999 「下り松遺跡・油うち遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書145

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2007 「元経社舊海道跡群(9)-(10)」

前橋市教育委員会 2015 「元経社舊海道跡群(91)-(95)-(102)」

前橋市教育委員会 2016 「元経社舊海道跡群(100)-(101)」

前橋市教育委員会 2020 「元経社舊海道跡群(134)」

前橋市教育委員会 2020 「元経社舊海道跡群(137)」

前橋市教育委員会 2020 「元経社舊海道跡群(75街区) No.2」

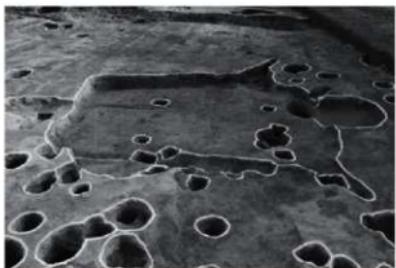
(公財) とちぎ未来づくり財団 2020 「くるま橋道路II」 栃木県埋蔵文化財調査報告書402集



調査区西側全景（上が北）



調査区東側全景（上が北）



H-1 全景（西から）



H-1 カマド1 全景（西から）



H-1 カマド2 全景（東から）



H-1 貯藏穴全景（西から）



H-2 全景（西から）



H-3 全景（西から）



H-3 カマド全景（西から）



H-4 全景（東から）



H-4 カマド全景（東から）



H-5 全景（西から）



H-5 カマド全景（西から）



H-5 カマド遺物出土状況（西から）



H-6 全景（北東から）



H-7 全景（北東から）



H-7 掘り方全景（西から）



H-7 遺物出土状況（南から）



H-7 カマド全景（南東から）



H-7 貯藏穴全景（北から）



H-8 全景（西から）



H-8 カマド全景（西から）



H-9 全景（西から）



H-10 全景（西から）



H-10 カマド全景（南西から）



H-11 全景（西から）



H-12全景（北から）



H-12カマド全景（北西から）



H-12カマド遺物出土状況（北から）



H-13全景（西から）



H-13カマド全景（西から）



H-14全景（西から）



H-15全景（西から）



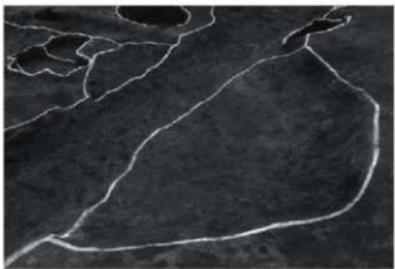
H-16全景（北西から）



T - 3 全景 (東から)



T - 4 全景 (西から)



T - 5 全景 (南から)



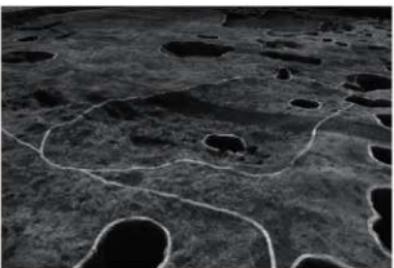
R - 1 全景 (南西から)



W - 10~14 全景 (西から)



W-1～5・7・9全景（北から）



W-6全景（北から）



W-8全景（西から）



I-1全景（西から）



I-2全景（西から）



I-3全景（西から）



D-9全景（東から）



D-10全景（西から）



D-11・12全景（南西から）



D-15全景（東から）



D-17全景（北西から）



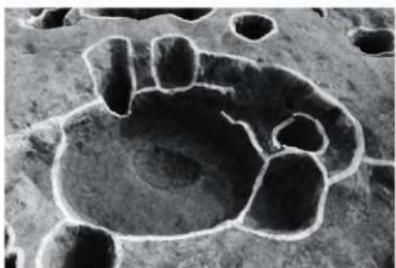
D-20・35全景（東から）



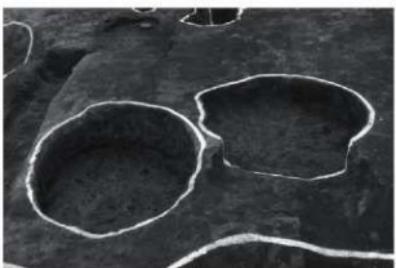
D-26・49全景（西から）



D-30全景（南西から）



D-40・67全景（東から）



D-43・68全景（東から）



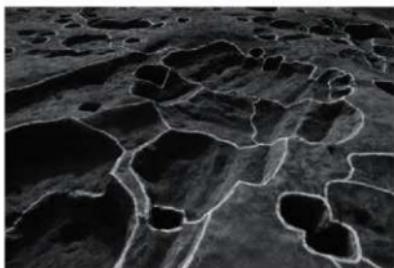
D-46全景（北西から）



D-75・76・82・98・99全景（西から）



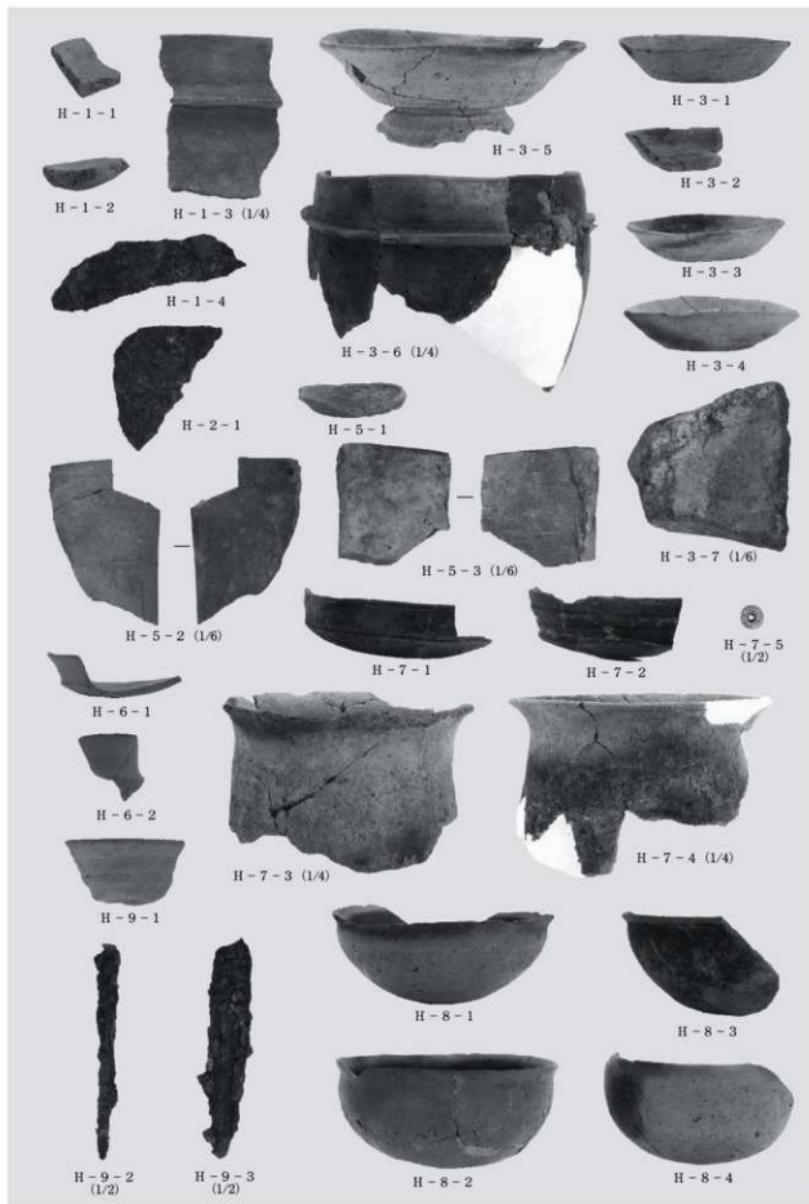
ピット群全景（東から）

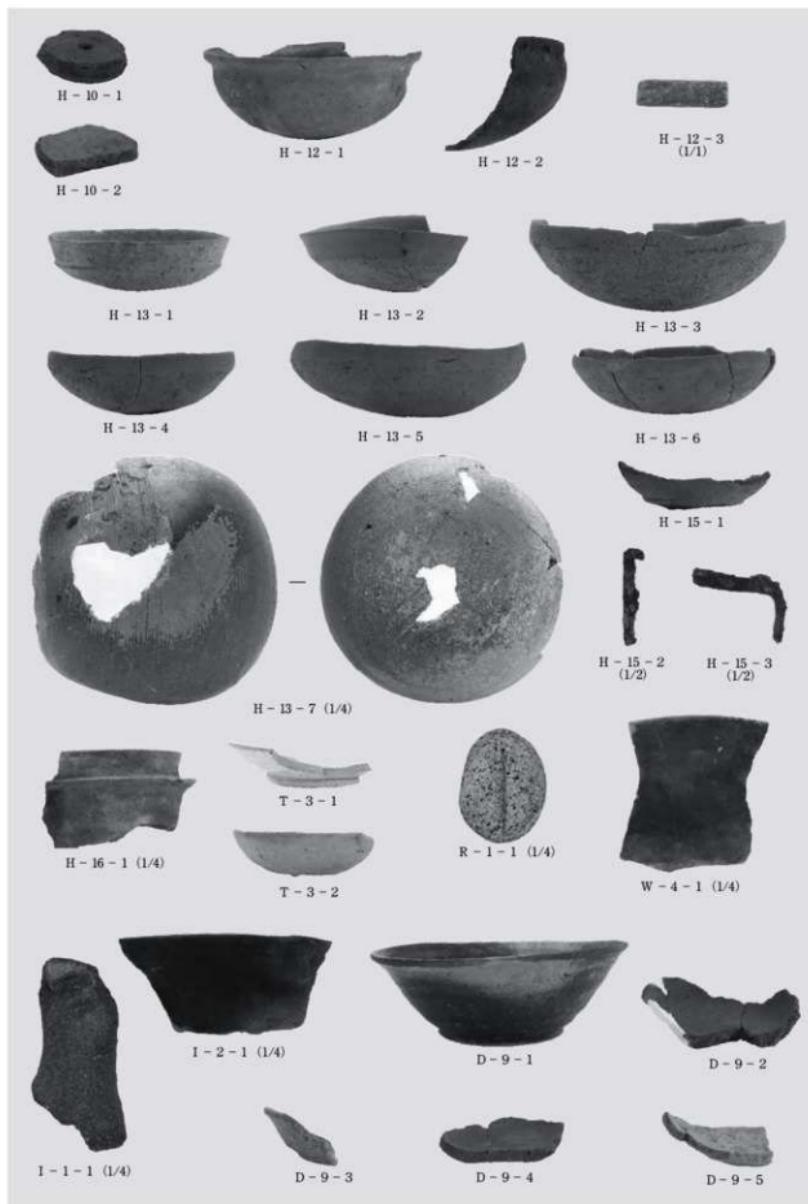


採掘坑跡全景（北から）



作業風景（南から）







D - 11 - 1 (1/1)



—



D - 11 - 2 (1/1)



—



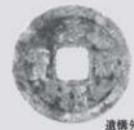
D - 67 - 1 (1/1)



D - 67 - 2 (1/1)



—



造佛外-7 (1/1)



D - 15 - 1



D - 15 - 2 (1/2)



D - 15 - 3 (1/1)



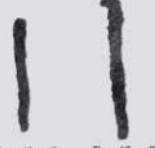
D - 30 - 1



D - 35 - 1



D - 46 - 1



D - 46 - 2 (1/2) D - 46 - 3 (1/2)



D - 65 - 1



D - 66 - 1



D - 69 - 1 (1/4)



P - 1 - 1



造佛外-1



P - 26 - 1



造佛外-2



造佛外-3



P - 1 - 2 (1/2)



造佛外-4 (1/1)



造佛外-5 (1/4)



—



造佛外-6

## 報告書抄録

ふりがな	もとそうじょおうみいせきぐん (145)
書名	元総社蒼海遺跡群 (145)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市鶴町3丁目11番4
発行年月日	2021年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
元総社蒼海遺跡群 (145)	群馬県前橋市鶴町3丁目11番4 3583, 3587-1	102016	2A261	36°23'18"	139°2'28"	2020.11.04 - 2020.12.25	1,467m <sup>2</sup>	前橋都市計画事業 元総社蒼海 土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海遺跡群 (145)	集落 その他	古墳 奈良 平安 中世	住居跡 堅穴状遺構 溝・根路 井戸 土坑 ピット	17軒 5基 14条 3基 100基 259基	土師器 須恵器 灰釉陶器 綠釉陶器 瓦 鉄製品 銅錢 小金剛仏 石製品	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5~11世紀代の集落跡</li> <li>・牛池川の崖線付近に土塼墓群</li> <li>・小金剛仏（11世紀前半頃）が出土</li> </ul>

### 元総社蒼海遺跡群 (145)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年3月23日 印刷

2021年3月24日 発行

発行 前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市鶴町3丁目11番4

編集 技研コンサル株式会社

印刷 朝日印刷工業株式会社



